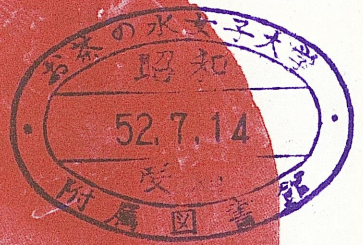


家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

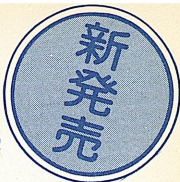
第七十六卷 第八号 日本幼稚園協会

8



*Magase*

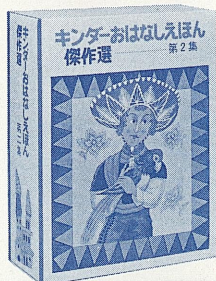
第1集のご好評におこたえして——



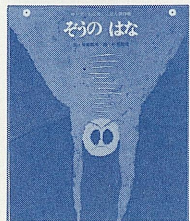
# キンダーおはなしえほん傑作選 第2集

全10冊 7,000円 L判・美麗ケース入

園文庫や、保育室に  
ぜひ お備えください。



- キンダーおはなしえほんの中で、特に好評だった物語を選んでいきます。
- 子どもたちに、読む楽しさをあたえるほんです。
- 装丁は、厚表紙、角背の堅牢な上製本になっています。



- |                   |                    |
|-------------------|--------------------|
| 1. さよならジャンボ       | 6. ぞうのはな           |
| 2. かぜのかみとこども      | 7. とうもろこしどろぼう      |
| 3. きたかぜのくれたテーブルかけ | 8. ロンロンじいさんのどうぶつえん |
| 4. げんこつやまのあかおに    | 9. わらのうし           |
| 5. なしうりとおじいさん     | 10. あめだまをたべたライオン   |

あわせてお備えください。

**第1集**  
全10冊 7,000円

- |                 |              |
|-----------------|--------------|
| 1. うりこひめとあまんじゃく | 6. おにがわら     |
| 2. あざらしチック      | 7. かしのきホテル   |
| 3. こびとといもむし     | 8. あんぱんまん    |
| 4. タオルおばけ       | 9. あいたたせんせい  |
| 5. おりづるのうた      | 10. 五つのはなのえき |

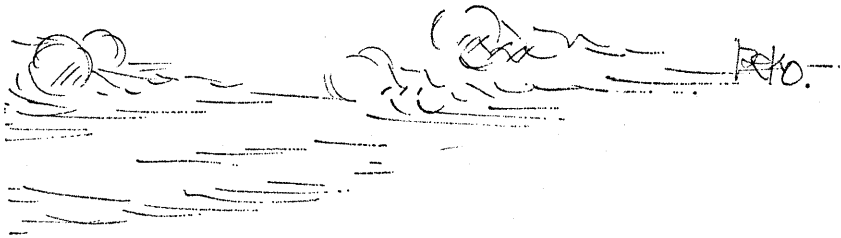
くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課 TEL 東京 (03) 292-7781(代) にお問い合わせください。

## フレーベル館

# 幼児の教育

第七十六卷 第八号





幼児の教育 目次

——第七十六卷 八月号——

© 1977  
日本幼稚園協会

表紙 永瀬義郎  
(112頁)

カット 中島英子

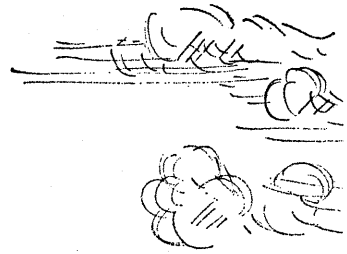
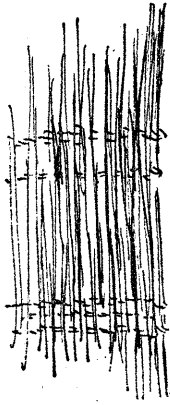
童心恐るべし……………野口 明……………(4)

保育における中心、脱中心

——画一的な保育の彼方へ——……………本田 和子……………(6)

私の幼児教育論——その出発点——……………佐藤 文子……………(16)

夏休みと本……………村石 京子……………(23)



太田 次郎…(26)

はたて貝の想い出……………中谷喜久子…(28)

ひとりひとりの子どもを見つめて ⑤……………赤羽美代子…(30)

米国の幼児教育における五つの実験(十二)……………大戸美也子…(32)

児童園芸学……………皆川美恵子…(38)

夏休みと本……………秋山 達子…(42)

……………荘司 雅子…(44)

写真・子どもたちの世界——“てれちやうなあ”——……………西本 真…(46)

私の保育……………村瀬 君子…(48)

★海外文献紹介……………(52)

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(九)……………津守 真…(56)

# 童心恐るべし



野口明

## 一

近頃私は姻戚筋から頼まれて、幼稚園を経営する学校法人に  
関係し、時々その途の人と会談する機会を持つようになった。  
以前お茶の水に居た時にも、又その後私立の保育系の短大を預  
かった時にも幼稚園に関係があった。然し現場での実務に触れ  
たことは無く、責任だけ負わされて、遠足等で無事解散の報告  
で安堵したり、行事にはPTAの方や、園児に対して一言する  
位のこととした。そして何時も園児への話の内容や用語には不  
安を覚えるのを常とした。先生方は結構難しいことを言われ  
も、それが通ずるらしく、三つ子の魂の感覚には案外鋭いもの  
があるように思われる。

## 二

過日学校法人の関係者と会食した時、一老園長が面白いこと  
を言った。「孫を連れて園によく来る老婦人が、園長室に来て、  
仏教的教育をと要望されたが、稗尊の教説の中には幼児教育の

言は一つも無いので、私にはできないと答えたら、その後私の

室には顔を見せなくなった」と。私も寡聞にして此の点何も知  
らないが、余計なこととは思ったが座興の思いつきで「童心は  
天真爛漫、衆生本来仏の典型であり、不善不安は大人の年配に  
なってからのこと故、幼児に説法は無用と思う」と言ってみ  
た。大笑いになって、その場はそれで済んだが、私は此の問題  
について、何か言い足りないようで心残りがあった。

## 三

私は今から七十年前に番町小学校の幼稚園に一年間位通った  
ので、その頃の幼稚園のことも多少記憶にある。小学校は三年  
から暁星学校に転じ、中学も其処を卒業したが、小学校時代は  
寄宿舎に入られた。フランス系のカトリックのミッション校  
ながら、信仰への勧説は無きに等しく寛大であった。中学は大  
と中、小学は小と、全体が三グループに分かれ、運動場も自習  
室も寝室も別々で、各組の監督の先生は、授業時間以外は、終

日受け持ちの寄宿生と生活を共にされた。先生方は皆独身で、骨を日本の土に埋める覚悟なので、日本を祖国の如く、日本の子どもをよく可愛がられた。小学組の寢室の二階は御堂で、毎朝勤行の讚美歌のオルガンの奏楽で夢を覚まされた。先生方への追慕、カトリックへの親しみは今も変わらないが、信仰に入ることには遂にできなかった。こういうきめこまかい感化は家庭教育や、社会教育の方に機縁が多そうである。殊に学生過剰の今のマスプロ学校では一層難しい。

#### 四

キリスト教では、アダムとエバがエデンの園で禁断の知恵の実を食して神意に反いたことを、原罪とする。人類の脳の優秀性が、幸福と同時に不幸や罪悪の原因であると言う見方は面白い。仏教では人生は苦であり、苦は因果因縁の集結であり、その原点は無明即ち無自覚の煩惱に在りとする。キリスト教では原罪を救うために神智を持ってクリストが下されたと言ひ、仏教では煩惱を解脱する仏智即ち般若の智で開眼せよと言う。種々の言葉や説明の仕方もあるが、要するに知に二種があり、生物が生活するための知識と、その知識を統制して生命を運営

するための智慧とがある。智は知と白との合字で明白な知、即ち明智乃至叡智と言ふ意である由。私は前者を生活知、後者を生命智と呼ぶこともある。共に大切な機能で、両者の健全な発達と均衡とに人類の道標がある。人の知能には両刃があり、繁栄と共に滅亡の因を秘めている。過去に於て地球を征服した生物は、皆その長所のために滅亡したとさえ言われる。

#### 五

先頃久しぶりに円覚寺の法話で感銘深く聞いた話がある。「アインシュタイン曰く、人間は特定の宗教の信者たるを要しないが、宗教的人間でなければならぬ」と。その宗教的とは、生命の問題に深い関心を持つことである」と。禪で只管打坐、即ち難解な仏教哲理など考えないで、ただ無念に呼吸三昧の静坐を貴ぶ風がある。私はこの頃、その人が宗教的人間であるならば、此の三昧の中に天地の生命に触れる契機が熟すのだらうと思うようになった。私は旧制高等学校の校長時代に純真な青年から種々教えられたように思う。まして青年より神や仏に近い幼児からは、もっと新鮮な啓示を貰い得るように思われるかどうかであろうか。

# 保育における中心、脱中心

——画一的な保育の彼方へ——

本田和子・大戸美也子

## 教師の研修と保育行動との関係

大戸美也子

現職研究会の先生方の研修も終りに近づいて参りますと、この一年間に私たちはどのようなことを知り、学んだかを確認してみたいくなります。このような時、私たちはどのようにしてそれを確認するでしょうか。ある人はノートをめぐって新しい情報の量で、自分の知ったこと、学んだことを確認するでしょうし、また、ある人はあれこれ活動を思い起こして、新しい発見、印象的な事柄を任意にあげて自らの成長を確認するかもしれません。このような確認行動のちがいは、「知る」とか「学ぶ」ということについて

の考え方の違いを反映しているように思われます。「知る」とか「学ぶ」ということは、知識の量が増えることであるとすると立場と、何か新しい発見をするというような質的な変化が個々に起こることであるとすると立場とは、その確認の仕方が異なってきました。さて、この他にどのような確認の方法が考えられるでしょうか。数年前、カリフォルニアのパシフィック・オークス大学のプレスロット等のおこなった研究 (Prescott, E. et al. Group Day Care as a childrearing environment: An Observational study of day care programs. Pasadena, Calif.: Pacific Oaks College, 1967 ED 024453) は、知ったり学んだりしたことを確認するもう一つのあり方を示しております。この研究は、性格も、教師についてのイメージも、養成期間の長さも異なる二百人の保育者の先生



方の保育の実際を観察し、これらの変数と保育行動との間にどのような関係があるかをとらえようとした研究で、養成(訓練)期間の長い教師ほど、子ども同士の学習への関心度が高く、子どもの行動に対する抑制・コントロールへの関心度が低い、という結果を見出しました。この立場は、知ったり学んだりしたことを保育の実際の姿(行動)からとらえていて、客観的な情報の量や主観的な印象からとらえるのでは明らかに異なる三つ目のあり方とすることが出来ます。研修の成果を、実際の保育行動の変化でとらえようとするこの第三の立場は、現場の保育の充実につながる先生方の行動の変化を期待して現職研修に参加している者として、大きな関心があります。また訓練をつんだ教師が、子どものさまざまな活動の展開に寛大になれるという、素人目には一寸矛盾するような研究結果も大変興味深いものです。いろいろ知ったり学んだりした先生が、知ったり学んだりする活動と一見無関係な子どもたちの活動に寛大になれるのは何故でしょうか。プレスコット等の研究は、因果関係を見出すことに主なねらいがありましたので、何故そうという因果関係が起こりうるのか、ということについては残念ながら充分な説明はしていません。それで、良い説明を求めているいろいろな本をよんでおりましたら、最近ある論文に出会って、教師の寛大に見る行動は、子どもの知ったり学んだ

りする過程に積極的な役割を果たしていることがはつきりしましたので、今日はこの論文を中心に、知ったり学んだりする過程とはどういうもので、その過程を意識的にとらえて発展させるためにはどうしたらよいか、という問題について話してみようと思います。

### 「認知発達——その新しい確認」

ここに紹介する論文は、ハーバード大学のシェルドン・ホワイトとピッツバーグ大学のアレキサンダー・シーゲルという認知発達の研究で有名な二人の学者がまとめた「認知発達——その新しい確認」(Young Children, Vol. 36(6), 1976, 425-436)と題する論文です。彼らは「子どもとは、自ら現実の行動モデルを形成する積極的な存在である」という児童観にたつ新しい認知の見方を形成するために、「知る仕組」「知る過程」「知る過程を明らかにする方法」について八つの刺激的な考え方を示しております。八つの観点はまだ一貫したものとなっていませんが、多面的で変化に富んだ現実の子どもに即した認知の見方を形成するために、極めて有効です。八つの観点とは次の通り。

- 1、認知とは多元的なものである。

2、学習・社会化・適応というものは完全に切り離すことができ  
ない。  
3、認知発達とは、ある意味で負荷要因を操作する技術 (techniques)  
を発達させることである。

4、学習とは「混乱しなくなる」過程である。

5、学習への動機付けは本来的に身につけている。

6、いわゆる学習といわれるものは、社会的学習であることが多  
い。

7、子どもの学習の「物理学」と「地理学」とがあり、それらは  
固有の方法と分析法を求める。

8、子どもは複数のパーソナリティーを発達させる。

この内、いくつか選んでその要点を紹介してみます。

子どもも大人も、たった一つの記憶装置やコンピューターによ  
って世界を理解しているのではなく、いくつかのコンピューター  
が独立にか相互に作用しあって作動しているというのが第一の要  
点です。たとえば、ピアジェは人間の認知能力が感覚運動、象  
徴、操作の三段階を経て発達していくことを明らかにしました  
が、このような発達が可能となるためには、人間には少なくとも  
三種のコンピューターが存在していることを示唆しています。ま  
た、最近の記憶の質の研究は、短期的記憶と長期的記憶、あるい

は視覚的記憶と聴覚的記憶とを区別し、それぞれ独立に機能する  
システムをもっているとみるようになり、人間の情報収集の基本  
的構造は、相互に関連を持ったいくつかのコンピューターから成  
りたっている、という見方をますます支持する傾向にあるとい  
います。

こうした子どもの認知の複雑性は、子どもの多様な要素からな  
る行動の流れに、よく反映しているというのが第二の要点です。  
たとえば、「子どもが砂がくずれないようにするため、いろいろ  
に砂をしめらせ自分の思う高さに到達すると思わず歓声をあげ、  
そはの子どもに話しかける……」というような光景は、日常的な  
園生活の一部です。この数分間の行動の流れが、知ったり学ん  
だりする過程であって、いわゆる認知的なものだけ、が学習なの  
ではない、情緒的なもの、社会的なもの、そしていわゆる認知的な  
ものが織りなす行動の流れを全体としてみていく必要性をとい  
います。このようなことは、現場の先生方にはあたり前すぎて何ら  
新しいことではないのかもしれませんが、一般には、認知の発達  
といえば情緒的、社会的要素とは別個の独立した体系として、た  
とえば前例の傍点部分のみを見ていこうとする傾向、言い換えま  
すと、行動の流れを分断して認知的能力ととらえられる言動だけ  
を抽出し、そのようにして集めた知識を組立てて、「能率的」か

「効率的」かの認知能力を高める特別のプログラムを作ろうとする傾向が強いし、またかつて認知をひどく狭くとらえてきた認知学者がこういうことを言い出している点でも、この提案は新鮮だと思えます。ホワイト等は、「子どもは、通常（大人が）とらえた以上の状況に適應し、こうした計算外の適應が、計算した適應にも重大な影響を与えている」として、他の諸能力と結合した認知能力の世界を明らかにしていくためには、文化人類学者のような目で子どもの行動の全体像をとらえ、分析していくことが大切ではないかと提案しています。

子どもがもつ複数のコンピュータは、状況に内在するさまざまな要因に觸発されて働くのですが、コンピュータの一部か、状況内のいずれかの要因がマイナスに作用して、結果的には認知の遂行力に個人差がでてくるというのが第三の要点です。認知の望ましい発達を促すためには、何がマイナスの要素となっているか、それがどのような条件のもとでそうなるのかをチェックすることが大切で、マイナス要因を克服していく過程にその子どもの発達があるという訳です。このような認知観を形成するために、**「知ることは、何か加わること」**あるいは**「新しいものを獲得すること」**逆にいえば、**「知らないとは、空っぽ」**というこれまでの言葉のイメージをすて、**「知るとは、混乱が少なくなる**

ことである」とするゲシュタルト心理学の見方が大切ではないか、というのが第四の提案です。これまでの要点を総合すると、子どもがさまざまな状況の中で多面的に活動できるということは、とりもなおさず子どもの持っている多種のコンピュータが充分に作動することを意味する訳ですから、認知活動の最も望ましい姿であるということができるといふことです。そして、子どもにおいて望ましい認知活動の展開しているときの教師の動きは、一見したところ子どもの多様な活動に寛大で、抑制やコントロールには無関心というふうには見えなんでしょうか。ホワイト等が長い認知発達の研究の末に、新しく確認した事柄が、子どもをしっかりと見つめて教育してきた現場の先生方の古い確認事項と共通するとしたら、学者と教師が協力して子どもの全体的な教育にあたれる時代がようやく到来したといふことができるかもしれません。

さて、子ども（大人も）の複雑な認知過程を理解したその先は、どのようにしてこの過程をとらえて発展させていくかということが問題となってきます。

## 認知過程の研究的とらえ方

子どもがどのように学習しているかその過程をとらえる研究的あり方として、ホワイト等は二つの方向——「物理学」の方向と「地理学」の方向があると指摘しています。物理学の手法をとると、特定の場合（実験室）で特定の時間（午前中の一時間というのが多い）、特定の問題解決行動を観察し、それを数秒単位（機械を使う時はそれ以下の単位の場合もある）で行動を分析する傾向があり、認知獲得の瞬間をキャッチできるといふ長所があります。しかし、その結果を異なる文脈や現実の教育状況の中で応用しようとすると、実験状況では排除してきた数々の要素が作用してきて、あまり応用価値がないという問題が起こってきます。一方、地理学の手法は、数か月とか数年という大きな間隔で認知発達の過程をみ、発達の序列や各段階の全体としての特色をとらえるもので、前者に比べきわめて大きな分析法をとっています。しかし、教育は通常、六年とか十二年とか長期にわたる一種の認知促進活動ですから、地理学の手法による認知研究の方が、教育の目標、方法の改善には良い提言ができる、というのがホワイト等の考えです。ところで、この二つのあり方は、細かすぎる

か大まかすぎるかして毎日の保育の中で子どもが知ったり、学んだりする過程をとらえて伸ばす手法としては不適當で、新しい方法を見出す必要があります。

## 認知過程の教育的とらえ方

さまざまな能力が複合的にかかわって一つの流れを持つ活動が形成され、その中で子どもは知ったり学んだりしているのですが、どういふことを知ったり学んだりしているかその内容をとらえるためには、活動過程をいくつかに区切って見ていかなければなりません。活動過程の区切り方はいくつかの形があつて、時間で区切って「(活動の) はじめ・真中・終り」といふふうにまとめるのも一つです。空間で区切って、活動の変化毎にまとまりをつけるのも一つです。その他に、時間・空間を区切らず、子ども同士や子どもと物、子どもとその内的世界との関係とそのかわり方をひとつのまとまりとして類型化していくあり方があります。これは、お茶の水女子大学の松村康平教授が発展させている「関係学」による子どもの活動の多面性と可変性とを同時にとらえる方法です。ホワイト等が主張している新しい認知教育、あるいは現場の先生方が主張してきた子どもの多様で変化に富んだ

活動をとらえて伸ばす総合的保育を展開していくためには、子どものかかわる対象、かかわり方、かかわる場所の変化をとらえるこのようなダイナミックな「ものさし」が必要ではないかと思えます。そして、この「ものさし」を使って、子どもの活動の中心を、状況と経過の中で移動させていくとき、その保育行動は、きつと多様な活動に寛大とみられるような行動となっているにちがひありません。望ましい保育と脱中心化とは、この意味で密接な関連があるのではないかと考えて、これを話し合いのテーマとして選んだのですが、この言葉がようやく出てきたところで私の持時間が出てしまいました。後は、本田先生がこの問題を発展してくださると思いますので、私の話はこれでおしまいにいたします。

本田 和子

### 脱中心をめぐって

次にバトンを受けとるのは、私です。ただ今大戸先生が、教育の中での「知る」「学ぶ」ということの考え方について、極めて示唆に富んだ興味深いお話をしてくださいました。ところで、

「知る」「学ぶ」ということは、まさに、教育の中心に位置づくところからですね。大戸先生は、教育の中心をお話くださったわけです。そこで私は、大戸先生のお話から思いつ切りはなれて、無関係に見えるようなことを幾つかお話ししてみようかと思えます。つまり、中心から逸れる、それこそ脱中心化を、身をもって実践してみようということです。

昨日、大戸先生と今日のテーマについて相談致しまして、「脱中心化」をめぐって、それぞれに話してみたら、ということになりました。これは、私にとって大変興味深いテーマです。その理由は幾つかあるのですが、例えば、日本の教育界は非常に中心志向が強く、すべて一つの中心に向かって凝縮していく傾向がありますね。全国津々浦々で、同じ目標の下に同じことをします。こんな体質では、オープンエデュケーションなどの考え方がいくら入ってきて、育つ余地がないのではないのでしょうか。画一的に、一つの中心に向かうのではなく、それぞれがふさわしい中心を見つけ出し、一つの中心から脱中心化していく、そのためには何を考えたらよいのでしょうか。

これは日本の教育界だけの問題ではなく、現代の日本の社会全体がかかえている問題なのかもしれませんが、それら社会文化的な土壌にも目を向けながら、中心と脱中心の問題を考えてみるこ

とに致しましょう。

### 子どもたちは中心を必要とするか

子どもの側から考えたとき、中心とはどんな意味を持つのでしょうか。彼らは、それを必要としているのでしょうか。脱中心化を言うなら、先ず中心を考えねばならないわけですね。

先日、こんな保育場面を目撃しました。その日は実習生の保育日で、その組の担任の先生は、よその組に観察にいらしていました。すると子どもたちは、実習生の周りに固まってしまって、上手く遊べないのですね。一寸実習生の姿が見えなくなると、すぐウロウロと探し始めます。遂に一人の女の子が廊下に出ていって、通りすがりの教頭さんに訴えました。「K先生(担任)も、お姉ちゃま(実習生)も、みんないなくなっちゃったの」

面白いことに、普通の日なら、そんなに先生にくっついていなくとも遊べるのです。少しぐらい先生の姿が見えなくとも、自分たちで好む活動に集中できる子どもたちなのですが、その日は、「今日はK先生じゃない人が保育する日」という形で、担任の不在を意識化させられてしまったのですね。普段は「あるべきものがある」という安心の上で、姿が見えなくとも気にならなかつ

ているのに、その日は、はっきりと「あるべきものが無くて、代りがある日」と指定されてしまった。そのために、「無い」「不在」という意識が顕在化され、「代り」をたえず目で追い求めてしまうという状態が生まれていたのでしょう。

子どもたちは、目に見えていなくとも、「よりどころ、中心」があるという把握の下で、安んじて自分の生活を営んでいたというわけです。これは、安全基地、拠点というべき性格のもので、いわゆる求めていく中心とは一寸ちがうかもしれませんが、いずれにしろ人間には、この拠点的なものが必要です。子どもたちが成長していく上でも、当然、この拠点は重要な意味を持ってきます。多くの場合、家庭では母親、幼稚園では担任の先生が、この拠点的役割を取るようですね。この拠点を核として、子どもの生活は広がっていくわけです。子どもの生活は、求心力と遠心力の相互作用で営まれているとも言えますね。従って、求心力と遠心の核、つまり中心は、当然ある筈でしょう。

もちろん保育者にとっても、保育そのものにも中心はある筈ですし、必要でもあるのですが、この中心がとかく他から与えられたものであり、他方本願的に他者の設けた中心に依存してしまう、しかもみんながより集まる体制的な中心に無条件でよりかかり、自分自身でいまの自分の中心が見出せなくなってしまう、そ

れが問題なのではないでしょうか。これは、どうやら日本の伝統文化とも深く結びついた問題のようです。日本の伝統文化とは、中心なき文化であるというみかたもあるのですから、次に、それをめぐって、幾つかのことを考えてみましょう。

### 中心なき文化の伝統

日本の伝統的な宗教、つまり古神道には、唯一絶対の神が出現せず、強力な唯一神の支配下に、整然とした秩序が形成されなかった、とよく言われていますね。確かに、八百万の神々、沢山の自然神に囲まれて、私どもの先祖たちは生活していたようです。自然そのまますを神と見る、自然の中ですべて神を見て、それらの神々と無理のない共存生活を展開する、そんな生き方を考えると、確かに、強力な中心を求める傾向は弱かったのかもしれないと思えてきます。

自然の中のあちこちに色んな神々がいて、それらが各々色々な機能を受けもっている、そして必要に応じて現れたり消えたりするのです。普段は関係がなくて、接触が生まれるとそこで出現する、そんな神々が多いですね。いついかなる時も、世界の中心に君臨し、支配する絶対の神というのは、かなり違いそうです。

日本人が極めて即物的なのも、その表われかもしれません。このことで、一つ面白い例をお話ししましょう。ある人がヨーロッパ旅行をした際、有名なイタリアの靴屋さんに靴を買いに行った時のことです。そこには、一、二足の靴しか飾ってない、椅子に座らされてまず質問されたのは、「どんな色で、どんな型の、どんなサイズの靴を買いたいのか、用途は何か」ということでした。ぼんやりと「赤い靴を買いたい」と考えていた彼女はうろたえて汗をかきながら、一生けんめい靴のイメージをまとめて返事をしたところ、数足の靴を出してきて、「あなたの欲しいのはこれです」と言われ、その中から選ばされたのです。私はびっくりしました。とてもイタリアで靴は買えそうもありません。私など「そろそろ靴を買おうかな」と思うと、「どんな靴」と考えるより先に、靴屋さんにフラリと入ってしまいます。沢山並んでいる靴をボンヤリ眺めながら、あれこれ手に取ってみていると、店員さんが寄ってきますね。「ハイヒールをお探ですか」なんて言われて、「あ、こんな高いヒールは要らない」と思う。「茶色をお選びですか」なんて言われて、「いいえ、私の欲しいのは黒だった」などと、少しずつイメージがはっきりしてきます。店員さんが当てずっぽうに色々言ってくれることを手がかりに、一つ一つ消去したり肯定したりして、やっとこさ欲しいものの靴

画が決まってくるのですね。それでも、突然ステキな靴の実物が目に入ってしまえば、それが「黒の中ヒールのタウンシューズ」なんていう条件に合わなくとも、物に即して、遂に、そちらを買ってしまったりするわけです。

これは何も買ひものの場合だけではありません。私どもは、とかく対象に密着して行為する傾向を持っています。例えば言葉でも、日本語には敬語がありますね。敬語とは、極めて「即対象的」な、相手に即して変化する言葉ですね。「あなた」と「私」に相当する言葉も沢山あります。「君・僕」「おまえ・おれ」「あなた・あたい」などと。これらの言葉は、日本人の即物性（即対象性）の表われだろうと思います。

日本の美術工芸も、対象に極めて密着しています。よく日本画には遠近感がないと言われますが、遠近感が無いとか立体表現に乏しいとか言うよりも、すべて近像なのです。一つ一つを至近距離で見、精密にそれを描く。描きたいもの一つ一つにぴったりくっついていくわけですから、奥行きは不要です。距離を置いて全体を対象化し、統一的に把握するのではなく、一つ一つ平面的に描き並べていくわけです。日本画の花の画など、花粉の粒まで細かく描かれていたりしますね。極く極く至近距離で見、部分部分を拡大鏡でとらえたように精密に描いていくわけです。

一つ一つの対象に密着して見るのですから、隣のものを見るときは視線を移動させなければならぬ、全体を把握する必要はなく、先ず一つを丁寧に見つめ、次に視線をずらして隣のものを見つめる、こうして対象密着主義の絵画が生まれるわけです。全体の統一が不要ということは、全体としての中心が不要ということですね。常に「いま、眼の前にあるもの」が中心なのです。

こうみても、宗教と同じように美術の世界でも、日本文化には強力な中心は生まれていない、中心なき文化を持った民族ということになりそうです。即物的で一つ一つの対象に関しては求心的、世界全体としては羅列混在というところでしょうか。

それならば、何故、そんな日本文化の伝統の上に、現代のような強力な中心志向、画一文化が出現したのでしょうか。難かしい問題ですね。ここで、幾つかのことが考えられます。

その一つは、よく言われるように、明治以降の急ぎすぎた近代化の影響とあるでしょう。一つ一つの対象に密着し、明確な統一的世界像を形成する必要もなく、おだやかに小さな共同体の中にまどろんでいた日本人が、急激に統一的近代國家を形成する必要に迫られた、そこで人為的に國家の中心が設定され、それに向けて強力に凝集するような政策が、あらゆる部門で打ち出された、というわけです。教育ももちろん例外ではありません。



ん。中心なしでやっていけた民族が、強力に生きる姿勢を変えさせられる必要が生じ、人為的な、しかも権力的な中心に、よしかかるよう促されたということになりますね。自分たちで中心を見出すべく努力したことがないので、与えられた政策的中心に対決する余地もなく、それに依存してしまっただけ、ということでしょう。そこで、凝集性の高い、特殊な近代国家が出来上がってしまったわけです。

また、それを支えるより大きな要因として、日本人はもともと没主体的で、受け身の文化を発達させてきたことを指摘する人もいます。日本語の中で、「自ら」と「自己」、つまり「自己の主体性において」ということと「自然発生的に」ということが、全く同義にとらえられているのは、この没主体性、受け身性の典型的な表われだとも考えられます。従って、こうした土壌の上に、統一的近代国家が作り上げられ、先進国なみの文明水準に、急テンポで追いつこうとしたところに、特有の問題が生じたわけです。

## 私たちの「現在」\*

さて、こうして現在の中心凝集志向を解明しようと試みたわけですが、それらが深い伝統の根に支えられていることに気付い

た、それならば、これから何ができるか、ということになりますね。私は、長年にわたって培われてきた民族の特性とは、そう簡単に変わるものでもないし、また、無理に変える必要もないと思っています。かといって、他律的な中心に安易によりかかり、与えられるものが変わると、それにふり廻されて次々と重点の置きどころを変えていく、こんな現状を肯定することもできません。

結局、次の二つを大切にしてみたらどうかしら、と考えています。一つは、「対象に即す、即物性」という日本の特性を最大限に発揮して、子どもの対象である幼児にびったりと密着してみることです。この点では、日本人は誰でも最高の保育者になれるのではないのでしょうか。距離を置いて眺める（対象化）のではなく、密着して共に生きてしまう（共感共存）というこの姿勢は、日本人の大人と子どもの関係の特性だと思っております。

子どもと一体化しつつ、「現在、ここで」大切なことを探っていく、ここに一つの日本的個性が発揮できるのではないのでしょうか。そして今一つは、言うまでもなく、一人の人間としての主体性の獲得、自分の中心を自分で探り求めていく努力を忘れてはならないでしょう。おくれはせながら、没主体性からの脱却を目指す、これがやはり現代を生きる人間の責務と言えましょう。

（幼児教育現職研究会より）

# 私の幼児教育論

## ——その出発点——

佐藤文子

私は国立大学教育学部の幼児教育研究室に所属し、主として幼稚園教員養成課程の学生指導にあたっております。私自身幼児に関心と興味をもって研究などしておりますが、教育という点では、大学の学生指導に主として責任をもつ者です。従って、私自身は一人の人間として自由に子どもに接し、自由に言いたいことを述べたいと思っても、私自身の経験にも自ら限界があり、私の幼児教育に関する発言も、上述の立場からの制約を受けたもの——意図的にそう限定するというのではなく——になると思います。

この三月に私たちの大学では幼稚園課程の一期生を卒業させました。また付属幼稚園ではじめての三年保育課程修了児を送り出しました。

こういう時期ですので、私自身この三年ないし四年間の経験を整理、反省したいと思っていましたし、編集部から、幼児教育に

ついて考えることを書くようにとの話があった時も、何か書けるだろうと思えたのでお引受けしたのですが、資料はたくさんあり、言いたいことは一杯ありながら、最近の体験について整理がつかかねて、思うように筆が進まずにありました。

国立大学の幼稚園課程には多くの問題がありますが、特に一期生の場合、大学側も卒業生を迎える社会も、受入れ体制不十分のまま出発したため、学生側には不満や不安が多く、私たち、幼稚園課程の学生に直接、接することの多い教官側も同様に戸惑うことが多く、時には教官——学生の関係も忘れて、互いに不満や不安を分かち合ったり、時にはこちらの期待にそわない学生にいらいらしたり、……と何かと感情的に巻き込まれることも度々でした。若い母親の長子に対する関係に近いものが、一期生との間にはあったように思われます。特に卒業論文提出期限の迫った冬休

み頃よりは、一方で学生との接触が濃密になりながら、就職問題など困難な事態もさげられず、四年制大学における幼稚園課程の意味などを考えると、卒業に際しても単純に「おめでどう」と言い切れない複雑な気持ちで、一期生を送り出しました。そして、この四年間の私自身の学生指導をどう評価したらよいのか、結論を求めあぐんで思案しているのが私の目下の状態です。

一方、三年前に付属幼稚園に三年保育課程がおかれたのを機会に、三年保育児の成長の過程を追跡したいと思ひ、入園当初より観察を続けて、卒園間際まで、発達検査をしたり、製作物の写真をとらせてもらったりして、今その整理をしているところで、こちらも三年保育の結果をどう評価したらよいのか、まだ結論に達していないところです。

これからは、幼稚園での観察を基に、幼児教育に関する問題を私なりに掘り起こし、考えてみたいと思うのですが、今はどこから手をつけてよいのか、私自身整理がついていない状態です。で、今回は、幼児教育について私が考えたり、発言する時、私がどういうところにおいて、どういう立場からするのか、先には私の外的立場を説明しましたが、もう少し主観的、内面的に明らかにしてみたいと思います。というのは、このことが私自身にすでに明らかになっているということではなく、先に述べた幼児教育に

対する私の立場——幼児に対する直接の興味、関心と、幼稚園課程の学生を指導する立場からの幼児教育に対する興味や関心という二重性が、私自身の中でどういうふうに関連して、幼児教育に対する問題意識となって出てくるのかを、私自身の日頃の考えや感情を整理しながら考えてみたいと思ひます。

そこで先ず、私が大学で学生と接触しながら、感ずることから出発したいと思ひます。

(1) 私たちのおかれた状況は、新しい課程の創設期ですので、この三—四年間は、カリキュラム、教育実習、卒論指導……等、幼稚園課程の学生指導体制をどうするかという問題が山積しておりました。幼稚園課程は新しくとも、国立大学の教育学部の枠内で考えていかなければならないということで、多くの制約に出会わざるを得ませんでした。そして私自身非常に大きな失望と挫折感を味わいました。また一期生が、大学の全般にわたる準備不充分さの中で、不満と不安を感じていたことはすでに述べました。カリキュラムや教育実習の内容は、幼稚園課程の学生指導上とても大切なことですが、今はこの点について詳しくふれません。ただ私は、大学のカリキュラムがどのように設定されているか、そして何よりもそこで教える教師の姿勢がどうかであるかということの

学生に与える影響の大きさを、新しい課程の創設期において、新たに知らされて、恐ろしくさえ感じました。

幼児教育は全ての教育の基礎であると言われていました。そして幼児期の教育にあたる保育者の、子どもの発達に及ぼす影響が強調されます。勿論、私はこのことを否定しませんが、教育における教師と子ども、あるいは学生との人間関係の重要さは、幼稚園でも大学でも変わらないとつくづく思われています。大学における教師の人的影響力を問題にせざるを得ないということ、一面で人間の可塑性の大きさを物語るものでしょう。しかしこの点について、最近の大学教授がどれほど真剣に積極的に考えているかということになると、私は非常に疑問に感じます。

(2)そこでこれに関連して、最近の大学教育の問題点を少し考えてみたいと思います。

先ず第一には、大学においても、学問や知識が人間を離れて一人歩きしているのではなく、誰が、何を、どのように、教えるかが重要な問題であるにもかかわらず、大学の授業が研究の対象になることは少なく、大学の教官、特に教育学部の教官の中には、大学を教育の現場として考えない——教育の現場は、小学校、中学校、高校までと考える——という奇妙な風潮があります。私

は、大学ももっとオープンに授業研究をすべきだと思うのです。

ここではこれ以上、この問題に深入りしませんが、ただ私が授業研究という時、今、小学校や中学校で行なわれている授業研究をそのまま肯定して、それを大学にも適用すべきだと考えているのではないこと、また授業研究によって、教官の自由な研究や講義を統制したり、監視すべきだと考えているのではないことを、一言つけ加えておきます。

第二には、大学というところは——というより教育は——学生の主体性、自主性を重んずべきものであり、教官が学生にとやかく干渉すべきものではないという考えが、特に若い教官の中に多くみられます。私自身、学生の主体性、自主性を重んずることに何の異論もありません。しかし主体性、自主性を重んずることは放任とは違いますし、主体性、自主性は自ら育つものではないと私は考えます。

主体性や自主性は個人の自我の確立に伴って育つものです。自我の確立が主体的、自主的行動を可能にすると同時に、主体的、自主的行動がまた自我の発達を促進させます。最近の青年には、アイデンティティーの確立——つまり自己の主体性の獲得——がおかれており、自己決定のできない若者がふえてきていることが指摘されています。自己主張はするが、本当の意味の主体的行動

の出てくる基盤である自己が十分確立していない——これが今日の学生の姿のようです。

アイデンティティーという言葉は、エリクソンが用いて以来、日本でも、今日では一種の流行語のようになっていきます。勿論エリクソン以前からも、この問題は青年期の人格形成上重要なことだったので、都市化の進んだ現代社会においては、全般的に自己確立が困難な状況にあるということは言えましょう。

しかしいづれにしても、自己の確立は一挙になされるものではありません。発達のしてみると、自己の確立は周囲の人々に対する抵抗や反抗の中で進められていきます。第一反抗期と言われる二歳半から三歳頃は、自分の欲求が、周囲の抵抗に出会って自分の思うように満たされないことを経験し、自分の欲求を阻止する環境に反抗する時期ですが、この時期は自我の芽生えの大切な時です。第二反抗期と言われる青年期前期には、思想や世界観、人生観、価値観など、精神的な面で周囲の大人の世界の抵抗を感じる時期です。そしてこの頃は自我の確立に重要な時期と言われています。このように周囲の抵抗に出会って環境を意識し、そして環境に抵抗している自分、抵抗を生み出す自分の欲求や主張を意識する過程で自我が発達していきます。

他の人の言動や自分の欲求、衝動につき動かされて行為するの

ではなく、「私が私の行為の主体である」という意識が私の全ての行為に伴っている時、換言すれば、私の行為の全てがそのような意識を反映している時、私は主体性のある人と言えるでしょう。そのような主体性は、私が行動して、私とは異なる他の人の動きにぶつかり、私の行為が相手に与えた影響に気づき、また相手の行為が私に与えた影響を意識するところに、つまり、私とは別の他の人との関係において、自分の行為の意味を自ら評価し、行動を調整するところに育ちます。

ものわかりのよい親や教師によって育てられて、小さい時から欲求は全て満たされ、何ら抵抗する必要のないまま成長してきた若者に、自己確立ができていないのは、ある意味では当然でしょう。大学で主体性を重んずると言っても、学生の中に主体性が育っていないとすれば、学生が自己を確立し主体性を獲得していくのを援助するのが、今日の大学教育の役目の一つではないでしょうか。しかし大学でもまた、学生の言いなりになり、好きなことをさせるのが理解ある教師だと考える教官が多いたら、今の学生は一体どういう大人になるのでしょうか。大人が自己の価値観に基づく真実と自信をもって若い人々と対決し、自己主張する時、若い人々の中に抵抗が生まれ、世代間の葛藤が生じ、互いに自己決定が迫られます。理解ある教師と自任している教官が、学

生の自己確立をますます難しくしているように私には思われるのです。

(3)最近の若い人々の自己確立のおくれと関連していると考えられるのですが、私は、最近大学でかなりの時間とエネルギーを学生の生活指導に費しております。挨拶とか返事の仕方とか、細かい点にまでふれば限りないことですが、私が最も痛切に感ずることは、集団生活をしていく上で、協同するとか、責任を果たすことが、今日の学生には非常に難しいのです。たとえば、研究室全体で何かしようという時、全員が楽しく参加できるような計画を立てるということが難しく、それぞれの学年とか、特定のグループの利害が前面に出てまともになくなる、ようやく係りの人が四苦八苦してままとめると、今度は実行の段階で「私は参加しない」、「私行くの止めた」という風にぬけてしまうのです。理由は何であれ、こういう具合で係りになった人だけが苦勞します。これは学生全般というより、幼稚園課程には女子学生が圧倒的に多いので、あるいは女子学生に顕著にみられる行動傾向なのかもしれません。幼稚園などで子どもの遊びを観察しても、男の子は多少自分の気に入らないことがあっても、自分を抑えて、共通の目標達成のために協力しようとする姿勢がみられるのに対し

て、女の子の場合には、嫌いな子と組んだりすると、「私やめた」という風にして、一人ぬけ、二人ぬけして、遊びがもり上がらないということがよくあります。私自身、女性として、これが女の人の特性だと決めつけたくないのですが、皆で共同する楽しみのため、自己犠牲——という言葉はあまり好きでないのですが——を厭わないという姿勢を、今の学生の中に見ることは稀です。共通の目的に向かって役割を分担し、責任を分かち合うという集団生活の基本を学習していないのか、それとも無視するのか、今の学校教育では、小学校から、話し合いによる民主的な集団の運営を経験しているはずなのに、一体どこに問題があるのでしょうか。

(4)今述べたことは、目的意識の稀薄さとも関係がありそうです。今日の学生は総じて、自分の人生に対する展望を欠いているように思われます。現代のような時代には人生の展望を持つことは難しいと言えはそれまでですが、明白な目的意識を持って大学生活を送っている学生がどれだけいるでしょうか。大学に入る迄は、大学入試に合格することだけが目的で、何のために大学に入るのかを考える余裕もなく、受験勉強をしてきた学生が多いのです。学歴社会とか受験体制の弊害が云々されます。

今日の社会体制が若い人々の人間的成長をゆがめていることは確かでしょう。しかしこの問題にも、ここではこれ以上立ち入りません。ともかく中核となる目的意識が稀薄ですので、大学における行動や活動の意味を判断、評価する基準は、楽しいか楽しくないか、ということになります。そしてその楽しさも、若い人々の間に「フィリング」という言葉が好んで用いられていますが、極めて感覚的なとらえ方です。そしてこのような意味把握の仕方、環境に対して自己中心的で、その場的な態度をとらせます。他の人々と共有しうるようなペースペクティヴを持って思考を展開することをせず、自分の感覚的な好みに合ったものだけを吸収し、そうでないものは省みないという態度で取捨選択します。最近の学生は文献の読み方が下手だとも言われますが、これは知識とか能力の問題というより、彼らの世界に対する姿勢に関係がありそうに思われるのですが、これについても、また改めて考え直したいと思います。

どうも現代学生批判のようになってしまいました。最近の学生の悪い面だけを並べ立てたようですが、私は、勿論、今の学生が全面的に「ダメだ」と言うつもりはありません。彼らにはまた多くの良い点もあります。しかし良いにつけ悪いにつけ、今の学生

の姿が非常に気になるということは、私が古い世代に入ってしまったからなのかもしれません。時には「こういう時代になったのだから、ロカマしく生活指導などするより……」と思ったりもしますが、一方でやはり「これでいいのだろうか」という疑問が心の隅に残ります。

卒業式の日、ある在學生が「これで昭和二十年代生まれは大学から消えたね」と言いました。一期生は在学中によく「私たちは、まだ本物のテレビッ子ではない。小学校の途中からテレビが家庭に入ってきたので、生まれた時にすでにテレビがあった三十年代の人たちとは断絶がある」というようなことを言っていました。昭和二十九年生まれと三十年生まれの間にどれだけの違いがあるのかはよくわかりませんが、昭和三十年代という日本の経済高度成長時代に生まれ育った人々が、間もなく、幼稚園や小学校の先生になり、あるいは親になるのでしょうか。一体彼らはどういう先生になり、どういう親になるのでしょうか。彼らに育てられ、教育された子どもたちはどういう世代を形成するのでしょうか。

以上幼児教育とは直接の関係がなさそうな最近の大学生の特徴を長く述べてきましたのは、二つの理由があります。

第一には、最初に述べましたように、私自身にとって、大学は教育の現場であり、そこで、私自身、教育の問題にどう取り組んでいるのか、自分の姿勢と立場を反省することなしに、幼児教育論を述べてもあまり意味がないように思われるのです。私自身、教育の現場で学生と接する時、理解したり、共感できる面と、どうしても理解し難い、あるいは受入れ難い彼らの行動や態度に出会うこともしばしばです。そういう面を、何となくわかった振りをして見過ごすよりも、私自身の価値観を前面に出して、はっきりと対決した方が、学生の、人間としての成長にプラスになるのではないかと考えます。そういう意味から、最近もやもやと感じていたものを、少し整理してみたわけです。

第二には、教育は人の一生にかかわることです。今の大学生も幼児期を過ごしてきました。彼らの幼児期はどんなだったのでしょうか。これからはどんなふうに成長していくのでしょうか。また今幼児期にある子どもたちも、やがて小学生、中学生……成人へと成長、発達していきます。

最近では生涯教育ということが主張されています。しかし現実には教育にたずさわる場合、ある人は幼稚園児を、ある人は小学生を、ある人は大学生をとるというふうに、ある程度の幅はあるにしても、一定の年齢段階にある人々を対象として、しかも大いにはか

なり長期にわたって、その段階の教育にのみ従事します。そうすると、人の一生という長期の展望をもってその年齢段階の子どもを見ると、人の一生という長期の展望をもってその年齢段階の子どもを見ると、とかく難しくなります。たとえ、幼稚園の先生には、幼児期が非常に拡大されて見えてきます。そして一寸した個人の発達差を深刻に受けとめたりしますが、人の一生という長期の展望に立って、同じ事象を見直すと、幼児期という枠内では重大に思えたことが実はあまり重要でなかったり、逆に些細なことと軽く扱っていたり……ということに気づくことがあります。

幼稚園の子どもも、大学生も、そして私たち大人も、今いる場所それぞれ異なっていますが、共に胎児期から乳幼児期、児童期、青年期、成人期、老年期、やがては死へと向かう人生の旅路を歩んでいます。その過程にはさまざまな出会いがあります。私たちが教育していると思っている子どもや学生から、私たちが教えられ、成長することも多いのです。各自が自分に真実に、今おかれている教育の現場で子どもや学生に出会う、そこから全ての教育も教育論も出発するものと考えます。

(秋田大学)



NHKの磯村尚徳氏と上智大学教授の渡辺昇一氏との対談の中に、知的生活について語りあっている中に次のような言葉があった。「文は人なり」という言葉も使われているが、プリヤ・サパラン『美食礼讃』の「君の食べているものを言いたまえ、君の人柄を当ててみせよう」の言葉にならって言えば、「君の蔵書を見せたまえ、君がいかなる人間か当ててみせよう」ということも言えると思えますね」と。

以前の乱読家を自ら認めていた頃にくらべると、随分貧弱な読書ぶりになってしまったけれど、それでも最近少しずつ本を読む意欲が自分の中に復活してきているのは嬉しい傾向だと思っている。新しく本棚に加わった数冊の背表紙を見ながら、私の読んだ本をみてどんな人間か当てるといふ人があるなら、最近の読書の傾向を何と評さ

れるのだろうか、ふと自分自身で問うてみたりもするのであった。

最近読んだ数冊の書物の中から、何をこにとりあげようかと思ひ迷ったが、幼児の教育に志を持っている者であっても、読書の内容は夫々であるのがその人間の特性でもあると思つて、幼児教育に直接つながりはないまでも底に流れているものとして考えさせられるものをあげてみた。

### 母のための教育学

●小原国芳著

●玉川大学出版部

最近、小原国芳氏の講話をうかがう機会があつて、教育に非常な情熱を持っておら

れるのを知った。固苦しい理論でなく、実にわかりやすく自分の信条とするところを学生や親たちに話される。聞く者は、新しい世代の者も、一つ世代をへだてた者も、共通して何か心うたれる思いがするのは、本當の教育者としての魂を持って語られるからなのだろう。著書も随分数多くあるようだが、まだ残念ながらあまり多くは読んでいないけれど、『母のための教育学』は学生のための教科書として使われているだけに、その講話と同じように自分の信念を明確に、しかも平易な文章で述べてあるところがうれしい。以前私が学生だった頃手にしていた教育学の専門書は、最後まで読むのにかんがりの忍耐を強要されるものが多かっただけに、易しく、しかも肝要なことははっきりと語つてあるところが小原氏の「文は人なり」の現われなのである。

全人教育を信条として、なにかんなく女子

が、母として、人間として、子女の教育の大切さを自覚することの重要性を若い世代に心をもつて述べてある。今後も、小原氏の著書を一冊ずつ味わっていききたいと思っている。

### しろばんば

●井上 靖著

●新潮社

こんな題名が突然出て来たりおかしいだろうか。でも私は少年期を主題にしたものを読むのがとりわけ好きである。『しろばんば』については、附属中学の卒業式の日、校長から生徒へのはなむけの言葉の中で、少年の心の成長について語られたので、未だ読んでいないことを恥しながら早

速手にした。これは主人公洪作少年の五歳から中学受験までの生いたちを美しい洗練された文体の中でつづった小説である。これは小説化されているけれど多分に自伝的なものがあり込まれていると感じさせられるところがあるが、それだけにこの洪作の生いたちは、今都会で育っている近隣社会とのつながりに乏しく、知識ばかり先行している多くの少年たちの生活とくらべてみて、宝石のように尊く感じられた。まだ幼児期とも言えるほんの幼ない時代から、少年が成長するにつれて体験的に受けとめる人間関係や社会の出来事、そうした中で次第に形成されていく少年期の美しい感受性が、きらきらと輝きながら私の胸に響いてくるのであった。

少年期を扱ったこんなに素晴らしいものに出あえたことがうれしかったと同時に、私の身近の子どもたちにも、二度とは通れない少年期にできるだけいろいろな体験を

味わわせてあげたいという思いが湧いて来てならなかった。

### ぼくは十二歳

●岡 真史著

●筑摩書房

おしまいに岡真史君という少年の遺稿集にふれたい。それは別れも告げずに行ってしまった十二歳の少年の詩集である。この少年の母親の岡百合子さんは附属高校時代親しかった同級生の間柄である。両親の愛の中でいつまでも十二歳の少年として生き続ける真史君の書き残したものが、一冊の本として両親の手でまとめられた。その中から一編の詩をのせたい。

無題

にんげん

あられずりのほうが

そんをする

すべすべ

してた方がよい

でもそれじゃ

この世の中

ぜんぜん

よくならない

この世の中に

自由なんて

あるだろうか

ひとつも

ありはしない

てめえだけで

かんがえろ

それが

じゆうなんだよ

かえしてよ

大人たち

なにをだって

きまつてるだろう

自分を

かえして

おねがいだよ

きれいごとでは

すまされない

こともある

まるくおさまらない

ことがある

そういう時

もうだめだと思ったら

自分じしんに

まけることになる

心のしゅうぜんに

いちばんいいのは

自分じしんを

ちようこくすることだ

あられずりに

あられずりに……

先にふれた『母のための教育学』の中に幼稚園教育について、次のような一節があった。「幼稚園の教育で大事なことはケチケチ小さく仕込まないこと。やがて、大人になった時、最も大きな正しい人間になり得るように荒削りにしておいてほしい」と。ここにはからずも、少年の心と教育者の心との一致を見つけて驚くのだった。

わが国の夏は、むし暑くて、読書に向いた季節とはいえません。といっても、私共教職にあるものは、明日の計画に追われないうで、自分の時間が得られる期間です。朝夕の涼しいときや、緑陰を選んで、本業に直接関係のない本を読み、豊かに暮らしたいと思えます。次に、いくつかの本をあげますが、それも参考までで、何でもお好みの本を読まれることをおすすめします。

### 米食肉食の文明

●筑波常治著

●NHKブックス

筑波さんは、東北大の農学部出身の科学

評論家です。この本は、農学の立場をふま

えて、日本人と稲作との深い関係を、西歐人の牧畜の関係と比較して論じてあります。しかし、決して固い専門の本ではありません。日本人の考え方や、生活のしかた（家庭内でなせ会話が少ないのかなど）などが、稲作と深いつながりのあることを、やさしく解説しています。科学が日本で定着しにくいこともふれられています。軽い気持ちで、読み進む間に、はっと思いついて考え直すようになると思えます。文章も上手で、読み易い本です。

### アメリカの小さな町から

●加藤秀俊著

●朝日選書

アメリカという国は、いろいろな面から紹介されています。しかし、この本ほど、ふつうのアメリカ人の生活が描かれている本は、少ないのではないのでしょうか。著者の加藤さんが、アイオワ州のスプリングフィールドという市で、家族とともに一年間を過ごした記録です。私たちが、新聞で知らされたり、駆け足の旅で目にしたアメリカと、この本に出てくるアメリカ人の生活とが、違うことに驚ろかされると思えますし、アメリカの庶民の生活や考え方がわかります。加藤さんは、現在学習院大学の社会学の教授ですが、評論家として広い分野で活躍している人です。筑波さんと同じように、文章は洗練されています。なお、この本が面白かったら、同じ著者の『イギリスの小さな町から』（朝日選書）も読んでみるよよいでしょう。

## 猿

## 人

●江原昭善著  
渡辺直経

●中公自然選書

今度は、少し固いものをあげましょう。

一体、人間はいつ、どこで誕生したのか、現在大きな問題になっています。新聞でも、しばしば紹介されていますから、お気づきの方もあると思います。

この本は、私たち人類の祖先はなんであったのかを、アフリカなどで発掘されている化石をもとにして、案内してくれます。

化石や人類学の本は、退屈なものが多いですが、この本は違います。発掘に当たる人々のいきいきした姿も紹介されていますし、何よりも著者の考え方が、大胆に述べ

られています。

江原さんも、渡辺さんも、人類学者ですが、決して化石屋さんではなく、文化や人間の生活に興味とするどい目を向けている人たちです。余り細かいところは気にしないで、ちょっと努力して全体を読むと、人間に対する新しい見方が身につくと思います。

## 人間—その誕生から死まで—

●朝日新聞科学部編

●朝日新聞社

現代の医学と生物学の進歩は、たいへんなもので、十年前に定説であったことが誤っていたり、逆に十年前にもの笑いにされていた考えが、考え直されたりしていま

す。

この本は、一九七五年に一年間、生命研究の第一線を紹介した新聞記事をまとめたものです。新聞記者が、程度の高い知識を、やさしく解説しています。誕生から成長、病氣、食べることの意味、老化とは何かなど、私たちが知っていてよいことが、たくさん盛り込まれています。

科学ぎらいの人でも、自分のことと考える読んでいただくと、生命とは何かについて興味がわくと思います。



# ほたて貝の想い出

中谷 喜久子



クリートの縁の上に、プリンが十二コもほたて貝のお皿にのって並んでいた。白い貝がらにドロココ色のプリンがよく似合っていた。

「せんせい、買いにきて」

「おじさんプリン下さい、いくらです

か」私はお客さんになった。

○

昔、ずっとむかし幼稚園の先生になったばかりの私の、「せいさく」をする日の朝の仕事はのり作りだった。

「あのー、すみませんがのりを作りますので粉をいただきましたのですが」

園舎とドア一つ隔てた園長先生のお宅の台所へ行って、あり合わせの小さなお鍋に小麦粉を分けていただく。水を入れ、割箸でつぶつぶの無くなるまでぐるぐる手早くかき混ぜる。また水を足して

久しぶりに暖かい日射し、出窓の下の小さな花壇のチューリップが今にも咲きだしそうである。色は赤。

友だちとふざけたりおしゃべりしたりするけれど、すぐすねてぐすぐずしたり、「家へ帰りたい」と言つて泣いてしまう新入園五歳児のR子が、庭の入口のフェンスにつかまってこちらを見ている。そのうちに砂場のそばへ近づいてきた。砂場ではトンネルに水を流しているグループと、お弁当ごっこをしているグループと、端の方でみんなとは関係なしに、大きいボールの中の泥をこねまわしている

N子（五歳）がいた。わき目もふらず一心不乱にこねまわしているそのすぐそばに、いつのまにかR子が来て立って見ている。そのうちにN子と同じようにしゃがんで、背中をまるくし、首をのばして、まるで引きずり込まれるように見つめはじめた。N子はR子に全く気づかぬ様子でボールの中の泥をなでたりこねたり平らにするのに夢中であった。私は真剣なそれでいてうっとりとした顔つきや手つきから、彼女の陶醉している様子を感じた。囲りの子どもたちはお弁当屋からプリン屋に変わっていた。砂場のコン

よくませ、コンロにかける。マッチで点火、火は弱火。手は休みなく鍋の中をまぜる。やがて、底の方からかたまってくる。かたまり具合をみながら、またお湯を足す。かきまわす。全体にトロリとなり、小さな噴火口のようにブクッ、ブクッとなったら小麦粉ののりができ上がるのであった。

子どもたちの遊ぶにぎやかな声を耳にしながら「つぶつぶのないように、やわらかすぎないように」と思いながら、少しあせり気味になって作るのだった。それからお鍋を持って保育室へ行き、湯気の立っているあつあつのりを、モトツモトツと小分けするお皿は、ほたて貝だった。いつも使っている（のり皿として）ので表面のうす赤茶色のザラザラはなくなり、内側は白くつるつるしていてちょうどよい銘々皿だった。

湯気のたっているできたてののりは、とても香ばしくおいしそうなので、指でペロリとなめてしまいう子がいたものだった。

今はセロテープ、荷造用テープ、両面テープ、のりはふた付き容器、何でも豊富にそろっていてみんな自由に使っている。もう小麦粉でのりを作ることもしなくなつた。ほたて貝の銘々皿も使わなくなつて久しい。――

○

N子は腕まくりした両手の手首までまっ黒にして、ボールの中をこねたりなでたりしている。R子はすぐ向かい側で砂を指先でいじり出した。N子は「これだよし」というように砂場からかけ出していつて戻ってきた。「せんせい、これ」と洗った両手をつき出して見せた。

「せんせい、どうぞコーヒードス」  
「ありがとう、ちょうどのどがかわいていたの」

「せんせい、プリンどうぞ」  
「まあ、おいしいこと。どうもごちそうさま」

あまりおいしく食べたので、私の口に砂が少しついてしまった。

「せんせい、ほんとうにたべればだめだよ」

目は子どもたちの姿を追い、耳では子どもたちのおしゃべりを聞き、口では子どもたちとおはなしをしているというのに、もう一人の私は十五年前の朝のひとときを過ごしていた。

とても満ち足りた思いで子どもたちと一緒に、砂場の後片づけをしたのだった。

（八戸小中野幼稚園）

# ひとりひとりの子どもを見つめて

⑤

## 赤羽 美代子

卒園式を目前にしたある朝、三歳児のDがいつになく頬を薄く赤らめて、頭の前から足の先まで、「僕は生きているんだ」と主張しているかのように、スキップをしながら園の玄関に入ってきた。日ごろのDは、親譲りか、幾分青ざめた顔である。D

の母親は、特別短気な気性の人で、Dの入園した頃の二、三か月間は、Dに対して言葉と手がほとんど同時に出る短気さであった。例えば「Dちゃん、だめ、だめ、早く、早く、まだ分からないの！」ピチャッ、ピチャッ（Dを叩く音）といった具合で、Dが母親とゆっくりと会話をする姿はあまり見られなかった。

Dはいつも、肩から掛ける布製の鞆の紐を手にとって、鞆をぶんぶん回しながら園の玄関に入ってくる。「Dちゃん、お友だちに鞆がぶつかるといけないよ」と言う教師の言葉に、すねて、その鞆をぶつけてくる。

そんなDも、母親も、最近はずっかり落ち着いて、一年の終りを迎えようとしているある朝のでき事である。

めずらしく頬を染めて愉快そうに入ってくるDを迎えて、瞬間、何かあるかと直感した。「Dちゃん、お早うございます」の教師の声に、Dはちょっといたずらっぽい顔をして、私の顔を見ながら、脇の鞆を両手でぎゅっと抱え込むように、上から押えてみせる。その後から、今登園して来た仲良しのYが、「お早うございます。あれ、Dちゃん何か持ってるの？」と聞く。Yが早くも行動開始とはかりにDの鞆を覗き込む。YとDは、毎朝どちらが先に登園してきても玄関で待ち合う仲の良さである。Yのはりきった問いに、Dはやや興奮気味で、「あ、Yちゃん、Yちゃんにだけ見せてあげるね」と言いながら、玄関の隅っこにYを引っばって行く。寝相でついたのか、くるっと上に巻き上がった、ちよっと赤毛の髪の毛を、ふわりふわりとゆら



して、角の隅で、Yに自分の鞆の中を覗かせている。Yは、薄暗い場所なので鞆の中がよく見えないのか、品物が理解できないのか、「出して見せてよ」と、Dに言っているらしい。Dは「ひみつ、ひみつ」と、声にならない声で言いながら、こそこそと出し始めた。「お早うございます」と、つぎつぎに子どもたちが登園してくる。そして、隅っこで「ひみつ事」をしているDとYを見つけては「何をしてんの？」と、いぶかしげに寄って行く。Dを中心にして、たちまち五、六人の三、四歳児の集団ができた。私も見に行きたいのだが、どうも教師には内緒の事らしい。

その、隅っこの場所は、いかにも「ひみつ」には良い場所なのである。適当に光をしゃ断している。蚊の集団発生でもしそうな、湿り気と、不気味さもある。人が通る道をちょっと避けている。子どもたちが寄ってたかってこれから繰り広げる未知の世界が、どんどんふくらんでいくには、いかにも格好な場所である。暗黙の相談事が、子ども同志間には、見えない糸でつながっていきらしい。ちらっ、ちらっと子どもたちは、私に視線を投げては、肩をつぼめ合ったり、笑ったりしている。

私は、Dが一体何を持ってきたのか、子どもたち以上に、む

ずむずとなり、見てはならない物を見たい気持ちをこらえた。暫くは、ぜんぜん気にしてはいない振りをしてみたり……。『見せて！ 見せて！』と声に出してみたり……。子どもたちもその都度、「だめ、だめ」とか「ねー」と頷き合ったりしながら、囲いの輪を、ちぢめたり、ふくらませたりしている。集団の中心人物になったDの得意な顔が、手にとるようである。

その時、私は電話で呼ばれた。近くにいた四歳児の担任のT先生に「ちょっと、あそこで面白い事がおきているので、様子を見ていてね」と言っておいて電話に出る。電話の後、五分程して戻ってくると、そこには先き程の「ひみつ」の光景は見られなかった。なぜか、淋しく、緊張した空気が流れている。先き程の場所から、子どもたち全員が移動していて、下駄箱の前で、Dがむっと、いつもの青白い顔で立っている。その周囲には、他の子どもたちが、同じくむっつりと立っている。

今しがた、幼児たちを暖かく迎え入れてくれたあの薄暗い隅っこが、がらーんとしていて、何か冷えびえと、大きな口をあけているようだ。

其の後のDの様子を、次号に記す事とする。

(靈南坂幼稚園)

# 米国の幼児教育における五つの実験(十一)

——オープン・エデュケーションの公教育への導入実験——

大戸 美也子

はじめに

一九六〇年代の半ばから七〇年代のはじめにかけて、政府主導ですすめられてきた福祉と教育あるいは保育を一体化する運動は、特定の社会階層の子どもたちを対象とする「補償教育」という分野を独立させ、それを公教育の中に定着させる働きを果たしてきた。この運動に費した経費、参加した子どもや大人の数、またこの運動のために開発されたプログラムや研究の数、そして専門誌や一般雑誌、新聞紙上を賑わした教師や専門家、行政官や政治家あるいは一般の人々の主張や提案や議論の数は、実に莫大なので、この時期は「補償教育の時代」と呼ばれるにふさわしい

ものであった。この運動は、基本的に一部の子どもたちの教育であったが、公教育の中で「恵まれぬ環境にある」子どもたちのための教育が進展している間に、「すべて」の子どもたちのための公教育改善運動もまた同時に進行していたのである。しかし、後者の場合、そのための特別の予算も、町や郡や州の教育行政者や政治家による派手なキャンペーンもなかったから、ごく限られた人々の中、しかし熱心な啓蒙活動を通して、これまたごく限られた教室の中で試行錯誤しながら展開していたのであった。教室内のひとりひとりの教師による小さな努力が集まって流れを作り、さらに類似した努力が合流し合い、やがて大きな教育運動の流れをなして公教育の主流に流れこんでいく過程は、文字通り流れを連想するものがある。川の流れがそうであるように、この運動もその過

程で何度か名称を変え、今日ではオープン・エデュケーションという名前で国内はもとより国外にまで知れわたる大きな教育運動のうねりとなってきた。このうねりの特性、中心を把握するためには、この運動の発生と拡大にかかわってきた諸要素を検討し、全体を展望する必要がある。本稿では、はじめにオープン・エデュケーション運動の形成過程をみてから、この運動の原理と実際、そして問題点について論じていくことにする。

## 一 米国におけるオープン・エデュケーションの発生と展開

この運動のきっかけを作ったのは、マサチューセッツ州の教師ハル(Hall, 1964) および彼の属していた教育発達センターの、特に基礎科学研究部門の同僚たちであった。一九六一年、ハルはイギリスのレスター大学の教授が著わした数学の教授法に興味を持って、その実際を見学するためにレスターシャーにおもむいた。そこで彼がみたものは、子どもが自由に課題を選び、自由に教室を移動し、自由に教師や仲間と話し合っって熱心に課題と取り組んでいる小学校の授業風景であった。それは、教師主導、教科書中心、沈黙重視の米国の公教育の実態とは異なり、直接経験を

通して自分で発見し、自分のペースで学習する、つまり彼自身が理想としてきた学習の姿であったのだ。今日、インフォーマル・エデュケーションとして知られている英国のこの授業形態に深く感動して帰国した彼は、熱烈な英国のニュー・スクールの信奉者となつて、国内にこれを伝播する活動をはじめるのである。

イギリスでの旅行体験を基盤にはじめられた個人的な公教育改善運動が、オープン・エデュケーションのそもそものはじまりとすることができる(Baith, 1972)。その後、十五年間の間に、もっと盛んなイギリス紹介の時期、国内における実験的試行の時期を経て、定着の時期あるいは反正対に反動の時期を同時に迎えている。それぞれの時期の具体的な動きについて、次に簡単に述べてみよう。

### (1) イギリス紹介の時期

イギリスの小学校、特に低学年(インファント・スクール)で次第に優勢になってきたインフォーマル・エデュケーションの思想と実践の紹介・伝播の窓口になったのは、ハルの属していた教育発達センターである。特に六〇年代の前半には、このセンターのスタッフによる英国はレスターシャー、オックスフォードシャ

あるいはプリストルでの数学や科学の新しい授業形態についてのドキュメントが、英国で進展しつつある個人に焦点をあてた新しい教育運動を知る唯一の情報源であった。同センターは、情報を取り次いだだけではなく、両国間の教師の交流の手助けもおこない、米国の教師には前述の三つの地域の学校見学を斡旋する一方で、英国のインファント・スクールの教師あるいは教員養成を担当している専門家を米国にまねいて、講演会、実習訓練などを主催したりした。この頃は、インフォーマル・エデュケーションとか、インテグレイテッド・デイとか、フリー・スクールとか、あるいはレスタシャー・プラン等さまざまな言い方でこの新しい教育運動をよんでいた。

教育発達センターの活動は極めて熱心であったが、その及ぶ範囲は、主としてニューイングランド地方に限られ、広大な米国全体からみれば実にささやかな活動でしかなかった。英国の新しい教育運動を、もっと広範囲の人々にあるいは地域に伝えたのは、一九六七年のブローデン報告書であった。

#### ブローデン報告書

一九六七年に刊行された、英国中央教育審議会の、政府に対するこの答申書については、周知のことであるし、専門書（小川、

一九七〇、七五）にもその内容の紹介があるので、ここではこの報告書の全体的な特徴と、英国におけるインフォーマル・エデュケーションの系譜の部分の紹介にとどめることにする。

この報告書の主旨は、その正式な名称に端的にあらわされているように、「児童と彼らの初等教育」(Children and Their Primary School)を具体的に提案することであった。初等学校が教師のものでもなく、教育行政者のものでもなく、政治家のものでもなく、「子どものため」の学び舎であるために、中央教育審議会が支持し、全英の初等学校に採用するよう奨励したのが、インフォーマル・エデュケーションであった。「学校」というものについて、報告書は次のように明記している。

「学校は単なるティーチング・ショップではない。価値と態度を伝えなければならない。子どもたちが、何よりも子どもとして、未来の大人としてではなく、生活することを学ぶコミュニティーである。家庭ではあらゆる年齢の人々と生活することを学ぶが、学校は子どもたちのためによく考えられた適正な環境が設定され、自分自身になることを許し、彼らに即した方法と速度で発達するよう用意されている。機会を均等化し、障害を補う試みをおこなう場でもある。個人的な発見、直接経験そして創造的な仕事の機会が、特に強調されなければならない。知識というもの

は、バラバラに分割したのではなく、仕事とあそびも相反するといふより相補うものであることを主張するものである。教育のあらゆる段階でこのような雰囲気の中で育つ子どもは、やがて調和のとれたそして成熟した大人になろうし、彼がその一員をなす社会にすみ、その社会に貢献し、そして社会を批判的にみることのできる大人になるといふ希望をいだいている」(第十五章五〇五)

このような学校観は、今世紀のはじめ(一九〇五年—明治三十七年)文部省がはじめて刊行した教師の処遇助言のハンドブックにみられることを、第十六章の「カリキュラムの自由に向かつて」という項目の所で述べている。

英国では、それまで教師の給料は「出来高払い」制がとられていて、学期末に視学官のおこなう期末テストの子どもの成績で給料の額が決められたという。一九〇五年にこれが是正されると同時に、文部省の教育介入も大幅に修正された。一九一八年、フィッシャー教育法で知られている初等教育法成立以来、「文部省が、公的初等教育の教授で実現を望んでいる唯一の画一制は、ひとりひとりの教師が、各学校の特別の要求と実情に最も合致した、また最も有効である教授法を自分で考え、自分で実行することである。実践上の細かい点についての画一性は、たとえそれで何かが得られようと、望ましいことではない」という基本方針が、現

行法まで順守されてきたという(第十六章六〇八)。

こういふ法案があつても、「伝統の力と教育者に固有の保守性が、変化の速度をよわめてきたし、グラマー・スクールの受験準備もまた、画一性に大きな影響を与えてきた」このような状況の中で、ナーズリー・スクールやインファント・スクール(小学校低学年)で少数の教師が実行してきた自由をとり入れた教育が発展してきたのは、決してルソーやペスタロッチやフレーベル等の教育思想家の原理ではなく、視学官の働きであると主張している。彼らの弁によれば、「これら思想家の著作が(この運動に)影響を与えたかどうか疑わしい。教育理論の本をよむために時間をさいてきた教師は殆どいないし、彼らが教育学部の学生時代だつてそうであつた」と断定しており、この報告書作成過程における視学官の発言力が推察される。この他に、二つの大戦をはさむ間にマクミラン姉妹によつて普及されたナーズリー・スクール運動、一九三〇年代(昭和初期)の体育、芸術における自由表現活動の発展、また第二次世界大戦中の学童疎開などが、インフォーマル・エデュケーションの発達系譜に位置づくべきことである。特に戦時学童疎開は、一クラス一担任制、学年制、教室内活動といふ伝統的な学校の型から子どもと教師とを解放させたと指摘している。

ブローデン報告は、イギリスの初等教育のあるべき姿をはっきり提示しているばかりでなく、その根拠から実践への方途まできわめて具体的に記してあるため、まさに教育実践の指針として現職教育者に広く読まれていることを、米国の教育学者エイスマン (Eisner, 1974) は、次のように伝えている。

「……ブローデン志向型の学校を訪れ、心接室に通されると、まず目につくのは二、三の教育雑誌と並んで修理に修理を重ねたブローデン報告書であった」

#### 米国におけるブローデン報告書

この報告書は、一九六八年の夏から秋にかけてフェザーストーン (1967) によって、『ニュー・リパブリック』誌を通して米国の大衆に紹介された。彼の「英国における初等学校の改革」という一連の記事は、米国の形式化した学校教育に不満をいだき、改革の道を模索しはじめていた教師や親を刺激し、教育の改革の気運を高める役割を果たした。この報告書への信頼感は、その後ひきつづいて出版された二冊の本によって一層強化された。一冊は、報告書作成者の一人でもあった視学官ブラッキーの著わした『初等学校の内側』であり、もう一冊は、インフォーマルな教育実践で名高いレスターシャー郡の女校長ブラウン等のまとめた実

践報告『初等学校における統合学習』である。前者は、英国の小学校が労働階級の子弟のために安上がりな教育をするために、少し詰め教室（五十名から六十名）で読み、書き、算術の教授を中心として始まったが、百年の歴史の間にゆっくりとしかし着実に、自由を認め子ども中心の教育への道をたどってきた過程を跡づけ、さらに、インフォーマルな教育の中で学科目や宗教をどのように扱うべきかその基本的考え方について論じている。一方後者は、レスターシャー郡のシェラード幼児学校での実践を通して、いかに統合学習 (the integrated day) が展開しているかを、環境の活用、教師の役割、子どもの学習の姿にふれながら具体的に述べている。たとえば学校の環境の章では、学校をとりまく（自然、社会的）環境が生かされ、また室内には大工、絵画製作、劇あそび、数学、読書等の学習センターが十以上も設置され、物質的には豊かで、精神的には受容的で暖かい環境作りが実際に行なわれていることを生き生きと伝えている。ブローデン報告書とこの二冊によって、英国で着々と広まりつつある「子どものため」の学校の輪郭が次第にはっきりしてくると、英国詣に参加する教師も増大し、米国各地にこの教育の信奉者が拡大していったのである。

(2) 国内での実験的試行の段階

いよいよ国内での実験的試行がはじまるのは、一九六八年以降である。六〇年代前半から、英国のニュー・スクールの紹介所の機能を果たしてきたマサチューセッツ州の教育発達センターは、英国の教師の協力を得ながら「対話、クラス運営、時間と空間の解放 (openess)」と、「子どもと教師双方の」自己実現」を重視する「成長を継続させるプラン」(Continuing Growth Plan) というアメリカ型のインフォーマルな教育プログラムを開発した。このプログラムは、一九六八年度から本格的に始ったフォロースルー・プログラムの向上に役立つプログラムとして市民権を得て、公教育の中に正式に入ることが許されたのである。初年度、公式には全米十個所でしかこのプログラムは採用されなかったが、すでにみたように、フォロースルーは国家主催のプログラム競争プロジェクトであったから、フォロースルー・プログラムとして選ばれたことだけで十分に全米の教育者の注目を得たのであった。しかも、このプログラムがようやく公教育に到達した六〇年代後半の教育界は、学生運動の拡がりと共に、公教育の非教育性、非人間性を内部告発する書物が続々と刊行され(例えばDennison, 1969; Kohl, 1969) 公立学校、特に都市のスラム街の学校改善がせまられてい

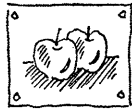
た時期でもあったので、人間的なインフォーマル教育が一種の改革モデルとして一層脚光をあびることになったのである。このような時期に、米国の公立学校の危機的状況をいくつも事例で示し、新しい学校の構想を英国のインフォーマルな教育によって具体的に提案し、さらに米国内でそれぞれ独立に開発され、試行錯誤をかえしていた類似したプログラムのすべてを組織的に紹介した一大教育ドキュメント『教育の危機』が刊行された。すぐれた教育ジャーナリスト、シルバーマンは、カーネギー財団の援助を受け、二年間にわたって英米各地の公立学校、ニュースクールを訪れ、「いかに米国の公立学校が、張りのない退屈きわまるものであるか、いかに抑圧的でくだらぬ規則でとりしきられているか、いかに知的にも、美的にも乾ききった環境であるか、教師や校長がいかに不遜であるか、いかに子どもたちを小馬鹿にしたあつかいとしているか」を数百の事例で告発し、「公立学校の主たる障害は、金の出し惜しみでも無関心や愚かさでもなく、それはまさに思慮のなさに基づくもの」であることを見出す。真剣に教育目的について考えなかったり、既成の方法を再検討しようとしていない、そうした思慮のなさを是正するために、彼はブローデン報告書にあるべき教育の目的をたずね、多くの英国のニュースクールの事例によって、その目的を達成するための技術、内容、機

構を示したのであった。そしてノースダコタのニュースタイル、ネブラスカのツソの幼児教育プログラム、あるいはフィラデルフィアの教師たちの学習センター等の例をひいて、米国内でも充分に教育改革の可能なことを主張している。しかしシルバーマンは、六〇年代の教育改革をゼロと評価する一方で、インフォーマル教育を過大評価したり、公家学校の悪い面だけが強調されていたり、あるいは語学教育、教員養成に断片的に英国ふうの教育哲学がみられるという理由で、まだ試行錯誤の雑多なプログラムを一括してモデル化している等、問題点もみられるので、これらを

さし引いて、このすぐれた啓蒙書のみていく必要がある。ただ六〇年代の教育改革が、外部から、上からできあいのプログラムを押しつけたために、現場の教師が離れていき、結果的には改革が不成功に終わったことを充分に自覚した上で、「学習形式の変革」を現場の教師によって力強くおしすすめるべきことを唱えた点は、高く評価されてよいし、この本の出現によって、ますますインフォーマルな教育を公教育の中に深く浸透させた貢献は特記されてよいものである。

(つづく)

## 児童園芸学



皆川 美恵子

春の三月号に紹介した浅山英一先生の児童園芸学の話は、何か参考になったでしょうか。

先生はよく、こんなことをおっしゃいます。世の中の三分の一の人たちは生まれつ

き植物が好きで、誰に言われなくても自分から種子をまいて植物を育て、楽しんでいゝ。もう三分の一の人たちは、こちらが植物のおもしろさ、美しさを示してあげてはじめて、植物に対する興味をおこし、植物

が好きになる。残りの三分の一の人たちは、いくら話しても興味を示さず、自分で種子をまいてみようとも思わない、この人たちは、「縁なき衆生」でどうしようもないのです。



私はどうやら、まんなかの三分の一に入るようです。浅山先生の話がきっかけとなつて、すっかり植物が好きになつてしまいました。『縁のある衆生』になつたようです。この浅山先生との御縁から、園芸教室に顔を出すようにもなりました。その教室などの話を参考にして、植物についての話を書いてみようと思います。みなさんの生活の中や、仕事の中で、少しでも役立てば幸いです。

### ほうせんか

日ざしの強い明るい日、庭や道端には、この花がよく咲いていました。花がおわたあとの実は、ちょっとさわつただけでパツとはじけました。友だちと競争で、熟してはじけそうな実をさわつたものです。

植物は、大地に根をはって、動物にくらべて、動きが目につきません。しか

し、このほうせんかの実のはじける動きは、はつきり目にみえるため、楽しいものです。ほうせんかの英名は、touch-me-not 『さわらないでね』と言うそうです。いくらそう言われても、子どもはさわりたいが、まだどんなんさわります。種子はまわりにはじき飛び、ふえていきます。子どもは、子どもも知らぬ間に、どこかに運ばれ、そこで来年芽を出すことでしょう。

小学校では、理科の時間、ほうせんかを茎から切つて、赤インクの中につけます。しばらくして切り口をみると、吸収した水分の上昇路である導管が赤く染まっています。もっと時間がたつと、茎や葉が赤くなつてきます。たくさん水を吸い、蒸散がさかんなほうせんかは、茎から葉に通じている維管束の導管を見るのに、うつつけの材料なのです。

ほうせんかは、幼稚園の庭、小学校の庭

には、ぜひ種子をまいて育てたい植物です。いやそれだけではありません。ぜひ各家庭でも育ててもらいたいです。そして種子が熟したら、その種子をいつも、十粒ほど備えておいてください。ほうせんかの種子には、筋肉をやわらげる成分があります。トゲがささった時など、種子をかんでぬると、ビクリしてかたくなっている筋肉がやわらかくなり、トゲがよくぬけます。鯛の硬い骨がのどにささった場合でも、種子をかんで呑み込めばいいのです。ほうせんかは、ホネヌキの異名があるのです。

インド、マライ、中国南部の熱帯原産のほうせんかは、高温下の方が育ちが順調です。四月に種子をまくよりは、五月、六月、七月の暖かくなつた頃にまき、夏から秋にかけて、花をみる方がよいでしょう。

### コスモスと彫刻

コスモスの花が、青く澄みきった秋空の下、涼しい風にそよいでいるのは、何か昔なつかしい、明治・大正時代の風情があります。竹久夢二の描く女性のうしろにでも、優しく咲いているのがお似合いのような花です。

こんなに日本的な感じのする花ですが、この花のふるさととはメキシコです。日本へ伝わったのは、明治九年ということですが。明治新政府は、文化政策の一環として、美術を奨励するため、工部美術学校をつくりました。その時、ヨーロッパの都市のいたるところに建てられ、市民の生活にとけこんでいる、美しく、楽しい芸術的な彫刻・塑造の作品が、日本の新しい都市にもあつたらと考えて、彫刻科を設けることにしました。そして、イタリアのすぐれた彫刻家ラグーザを招き、指導をお願いしました。ラグーザは、油土で原型をつくり、石膏にとる方法や、大理石の彫刻法などを日本

の若い人々に教えました。さて、このラグーザは日本へ来る時、ヨーロッパで広く栽培されていたコスモスを持ってきました。明治九年とは一八七六年ですから、百年前

のことです。ラグーザは、たすぎがけをした健康な日本娘をモデルに「娘の胸像」という作品を残しています。この娘は清原玉女と言ひ、のちラグーザと結婚して、ラグーザ・お玉となった人です。ラグーザは六年間、指導のため日本に滞在し、明治十六年に帰国しました。

日本の彫刻美術は、どうもヨーロッパと異なり、都市の公園の一角や、家並の中に調和しないようです。彫刻よりは、コスモスの花の方が、日本の公園や街角にびっぴりではないでしょうか。野原や公園や土手や小さな庭など、日本国中あちこちで、秋の光で輝いたり、秋風で踊ったり、強い野分でしなだれているコスモスのことを知ったら、ラグーザは何と思うことでしょう。

日本を愛したラグーザは、きっと天国でよるこんでくれるのではないのでしょうか。

### かんびょうの花

遠足や運動会では、お弁当が大きな楽しみです。お弁当では何が好きでしょうか？海苔巻が好きだという方もいらっしゃるのではないでしょうか。海苔巻には、よくかんびょうが使われます。そのかんびょうですが、夕顔からとること、どこかで耳にしたことがあるのではないのでしょうか。ですから、昼間の暑さが残る夏の夕方から夜中白く涼しげに咲く、あの庭の夕顔からかんびょうがとれると思われている方もいらっしゃると思います。もしそうだとしたら、ここでその誤解をといて下さい。庭に咲く園芸種の夕顔は、その名が俗称で、本当は夜顔といひます。夜顔は夜中咲き通し、お月様と顔を合わすことから、ム

トン・フラワーとも呼ばれます。また芳香をあたりに漂わせる、花径十二センチメートルの華麗な姿から、夜会草とも呼ばれています。夜顔は、朝顔や、野辺に咲く昼顔と同じヒルガオ科です。そして、植物学から夕顔といわれる本当の夕顔は、かんびょうをとるウリ科の一年生蔓草なのです。ウリ科ですから、キュウリ、スイカ、ヘチマ、ヒョウタンなどの仲間です。夕顔の若い果実は煮て食べます。成熟した果実の果肉が、薄く細長く、ひものようにむかれ、乾燥されて、かんびょうになるのです。もつとよく熟した果実は、皮がヒョウタンの皮のように堅くなります。そのようなものは、中身がくりぬかれ、郷土玩具のお面や、炭取り等に利用されています。

夕顔といえば、『源氏物語』に登場する女性「夕顔」が思ひうかびます。京の都の中、庶民的な小さい家が立ち並んだ一角に、一軒、夕顔が、しっかりしない軒端や

板囲いに、おし気もなくからみついで、すがしい花を咲かせていました。そんな家に、ひっそり住んでいた女性が、「夕顔」です。つましく、内気でやさしい、頼り気ない様子の、生霊によってはかなくこの世を去る「夕顔」は、ものにしたより、しなだれる蔓草の花、夕べに咲き、朝に凋むはかない花の名にびつたりの女性です。この夕顔の花が、園芸種の芳香のある優美な夜顔であれば、どれほど美しく思うでしょうが、そうではありません。夜顔は、明治のはじめに日本に入ってきているので、この夕顔は、本当の夕顔、つまり、かんびょうの花なのです。薄幸のヒロイン「夕顔」は、あくまで素朴で、庶民的な生業なまわの中の人 のよう です。

白く快げに咲いた花を、光源氏が所望します。光源氏の使いの者に、夕顔の家の女むすめ童は、「この扇の上うへにのせて、差し上げて下さいませ。花の蔓は風情がなごさうです

から」と、扇を差し出します。その白い扇には、香が深く薫たきしめてあります。花はまだしも、茎や蔓は、軟毛があつて見栄えがしない、まあ言ってみれば野菜の花です。そのような花を、作者紫式部は、香りを添えて雅みやびびに扱あつかったのです。まさに、心にくい演出と言えるのではないのでしょうか。

時代が少し下がり、平安時代は十一世紀後半、奥羽地方の豪族、阿部頼時、そしてその子貞任、宗任が源氏と戦いました。前九年の役といわれる戦いです。その戦いに夕顔が使われました。人間の顔位の大きさはある夕顔の果実を並べ、伏兵と見せかけたのです。同じ平安時代とはいえ、『源氏物語』の世界とはかけ離れた、武士たちの夕顔の利用法といえるでしょう。北上川流域のその古戦場は、今でも、「夕顔顔」として名前をとどめています。

幼稚園の先生方やお母様方に是非読んで頂きたいと思う本に、三つの種類があります。その一つは、子どもたちが実際に読み、心から楽しんでいるものです。たとえば、藤子不二雄作『ドラえもん』シリーズ（小学館）ですが、ここ数年來、子どもたちの間のベスト・セラーの一つです。おとなが見ると荒唐無稽の意味もないものに見えるこのマンガシリーズが、どうして子どもたちに喜ばれるのでしょうか。

『ドラえもん』の楽しさは、おとなの限定された時間や空間の約束を無視しているところにあります。ドラえもんは万能のポケットから、自由に空を飛べるヘリトンボをだしたり、考えていることが皆反対になつてしまうコベアベの笛をだしたり、どこへでものびていって屋根の上にあがってしまったボールをとったり、どろぼうをし

ってしまったたりするビーヒョロロブをとりだしたりします。中でも時間を越えて未來にも過去にも自由に出入りできるタイム・マシンの存在は、子どもたちの夢です。おとなとは異なった子どもたちの時間や空間の考え方、人間の限りない創意工夫の才能を信じて、自由に変身し、宇宙を駆けめぐるファンタジーをとばすことは、子どもの世界ではじめてできることです。急速な発達の過程で、心身のバランスを失いかける時、遠い原始の世界の海底火山の爆発を考えることは、ちょうど無意識の奥底のもやもやとした気分を発散させることにも通じるすばらしいアイデアといえます。私たちおとなは、かつて自分が子どもであったことも忘れてしまつて、ドラえもんのようなマンガを見ても、なかなかその気分と同調することができません。しか

し、このようなファンタジーの中に子どもが成長する心がひそんでいることをもう一度考えて頂きたいと思います。テレビなどで子どもたちが喜ぶ怪獣たちや、一連の空とぶ英雄たち、変身する主人公なども同様な意味を持つものといえましょう。ただばかばかしい子ども向きマンガや番組とは思わずに、もう一度、どんな所が子ども心にアツピルするのか、考えてみたいと思います。



第二の種類は、おとなが子どもに読ませたいと思うものです。たとえば、J・M・パリー作の『ビーター・パン』（岩波少年文庫）や、『ビーター・パンとウェンディ』（福音館書店）です。ビーター・パンのお話は、ただ子ども向きだからというのでは

なく、先生方やお母様方にも、是非もう一度読んで頂きたいものと思います。もともとは鳥であって、半分は人間の子で、半分は妖精たちの仲間のピーターは、子どもたちの憧れの的ですが。雄々しく、親切で、しかもいたずらっ気の沢山あるピーターは、男の子たちの理想であり、女の子たちの心の中の未来の相手のイメージでしょう。ウエンディはやさしく、かわいらしく、それでいてちょっぴり母親みたいな思いやりがあって、女の子の理想であると同時に、男の子の心の奥底に夢の女性像を育てあげます。彼らは永遠の子どもたちなのです。私たちがおとなもいつまでもピーターやウエンディのような永遠の子どもたちを忘れずに、心の中に持っていたいものと思います。

最後に、子どもたちと一緒に読む本ではなく、おとなが子どもと共に夢を育てていくアダルト・ファンタジーをおすすめします。たとえば最近、世界中で若い人たちの間のベスト・セラーとなった言語学の教授のJ・R・R・トールキン作『指輪物語』全六巻（評論社）です。トールキンの著作はその他にも、岩波や評論社から出ていますが、一口にいつて、それはおとなの心の中に生きている子どもたちの世界をえがいたものといえます。この本をただ筋だけでなく、もっと凝って読みたい方は、過去の文献や、言語の中にそれぞれの名前や言葉の源流を探ることができます。トールキンに関しては、沢山の参考文献や研究書がある。一つの学問のように勉強することもできます。

同様にジョージ・マクドナルド作『リリ

ス』（月刊ペン社）、あるいは、デ・ラ・マア作『三匹の高貴な猿』（図書刊行会）なども、おとなが読んで面白いものです。これらの著作にでてくる情景や特異な文章の持つ雰囲気、奇妙な造語、語呂合わせの楽しさなどは、子どものみが持つ世界とおとなの現実の世界との合体ともいえます。いわゆる自閉的といわれる子どもたちの言動も、このような世界からもう一度見直してみることができないのではないのでしょうか。



眞昼のランプ

● 根岸草笛著

● ひかりのくに社

本書は著者自身が述べているように、「祈りを込めて学生と学生を愛する方々に捧げる」ために書かれたものである。ここで著者が実際に対象にしている学生は、やがて保育者になる方々であるところに、私はとくに意味を見出しているのである。というのはこの書の副題に「学生と学生を愛した人達の物語」とあるように本書の内容は、すべて著者が保育者を養成していた十

数年間の学生との美しい物語ばかりであるからである。

本書の著者根岸草笛女史（現在の山下俊郎氏夫人）はかつて日本保育学会の理事の一人であり、保育界、とくに保育所関係では指導的な立場にたっておられる方である。根岸女史は若き日から保母として出発し、やがて園長になり、そして児童福祉審議会委員、全日本保育連合副会長をもつとめ、広く保育界に貢献された方である。その貴重な体験と保育に関する識見とが高く評価されて、一躍長野県保育専門学院の初代の学院長に抜擢された。学園創設という激務、それに院長といういかめしい管理職にありながら、彼女が学生たちに対して、いかに楽しい学園生活を送らせるために心温まる細かい配慮までなされてきたか

は、この物語を読む方々の誰しもが深く感ずるところであらう。「親猿子猿と呼び合って暮した信濃路のメルヘンのお城のような小さな学園の、学生と教師の間に奏された真の学生讃歌」であるといっていることから察せられるように、著者の学生に対する愛、それに答える学生の師に対する敬慕の心が、本書に満ちあふれている。「私たちは、牧場の花が大地と親しいように、お互いに親しくつき合い、教師は学生の人間の開花に心を熱くして努め、本当に楽しく、そしてまた厳しく生活をともしました」このまえがきの著者の言葉を讀んだとき、これはまさに親心子心の教育を唱えていたペスタロッチの教育精神を、著者は自分の美しい学園で実践していると私は直観した。

『真昼のランプ』という題は、古代ギリシャの哲人ディオゲネスが、真昼に灯のともったランプを掲げて群集の中を歩きまわったという逸話からとったものである。なぜ真昼にランプなど掲げているかと聞かれてディオゲネスは「人間を探している」と答えたという。

根岸女史がこの話から本書の書名をとった意味もわからないことはない。本書の内容を読めばわかるように、いわゆる現代の大学生活には見られない師弟の信頼感や愛情がみなぎっており、人間的なあまりにも人間的なヒューマニズムやロマンティズムが学園全体を流れている。もちろんときにはセンチメンタリズムも感じさせられるが。そういう意味で本書は、わが国の大学紛争以来の師弟間の断絶、荒野のような学園、味気ない学園生活、悪しき合理主義や

実利主義でとりひきする単位取得などの現状に対する一服の清涼剤ではある。

本書の内容は、

I ユーモア教室

II 職員紹介

III 学園生活入門

IV ガイダンス

V ゼミナール

VI ケースワーク

VII 子どもたちとの触れ合い

VIII ボランティア活動

の八章からなっている。

どれを読んでも、ユーモアと機智、

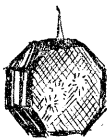
かいぎやくや爆笑のうちに楽しくしかもきびしい授業やガイダンスが行なわれている。学生にやられる教授、逆に教授にやられる学生、その間の偽りなき人間同志のや

りとりなど、うるわしいほほえましい風景は読む人の心をなごやかにさせる。紙数の関係でくわしく内容を紹介することはできないが、とにかく本書は学生、そして青春期にある学生と応対している方々には、きわめて魅力的な内容に満ちている。このよ

うな学園生活を体験した保育者であれば、どうして幼児を単なるテストの対象として考えたり、幼児を自分の思い通りにひきまわしたりできるであろうか。

その意味で本書を、保育者をめざす学生や保育者を養成している方々のみならず、

広く現場の幼児教育者にもおすすめたいたものである。





“てれちやうなあ”





写真撮影 西本 真

## 私の保育 村瀬 君子

私が現在勤務している阿佐ヶ谷教会つぼみ会は、戦後の混乱期に近隣の幼児のために建てられました。以来何人もの保育者によって支えられてきましたが、特に幼児教育を勉強した人々だけではなく、様々な人が臨時に手伝ったりして形づくられてきました。

現在、遊びを大切にしている生活を考え続けていますが、つぼみ会に集まる全ての人々が各々主人公になり、見た目には何も特別ではない普通の生活をするという姿勢も、初期の様々な人々が必要に応じてつぼみ会の会員となったという時代から流れているように思います。

つぼみ会のもうひとつの特徴は、正式名称を「幼稚園」と呼べないことです。官庁用語にしたがえば「幼稚園類似の幼児施設」ということになります。幼稚園に似ているところというわけです。しかし実践する私共にとって、何をすればこの名称に応えることができるかは理解し難いものがあります。公の認可

を受けていなくても（誰にも制約されない）、また幼稚園と呼ばれるなくても、毎日の生活の中で何をしなければならないかを問い続けることができるのであれば、どんなに小さくても幼児の集まる所として生き続けることができるのではないかと思っております。

今回与えられました機会に、そんなことから、昨年入園した男児K夫（昭和四十六年十月生）の入園直後からの行動を書き、その時々感想を述べさせていただきます。

### 年少男児K夫の行動から

K夫は言語によって人と交わることができませんが、時に応じて自分の意志を伝える方法は持っています。

入園後半月過ぎたある朝「フンフン」言っただけ嫌の悪いK夫は、教師の手をとって門の方へ引っ張っていきます。帰りたいと言っているのかと思ひ、「すぐお迎えに来て下さるわよ」と言っても全く受け付けず、門を開けると言うように教師の手を門にかけさせ、再三目で訴えているのです。どうしたらよいのかと一瞬は考えますが、この子どもの要求についてよく考えをめぐらす余裕などはありません。しかしK夫の要求通りにしてみようと心に決め、次の行動に移ることにしました。

第一日目は二、三十メートル程道路を歩きました。この方向は園からK夫の家へ続く道です。ある地点まで行くところと園の方へ向き直り、今度は機嫌よく門を入るのです。

入園前までは殆んど外出をしたこともないようです。家庭で閉じ込められていた生活から（狭い園庭とはいえK夫にとっては開放された広い）新しい生活に入り、更に登園時に母親と離れたりすることの不安や緊張が、K夫の朝からの呼吸を乱してしまうのかもしれない。今来た道に戻りたいという要求を聞き入れてくれる教師と手をつなぎ、登園の儀式を（日によって歩く距離は異なるのですが）やり直すことで、それ以後の時間を水遊びや泥んこに没頭できたように思います。

私たち大人は失敗ややり直しを恐れたり、恥ずかしく思ったりして、適当なところで物事をやめてしまいがちですが、朝の行事を通してやり直しによって立ち直るK夫を素晴らしい、どの子どもにもやり直しや失敗を自分で見つける機会を与えてやりたいと、つくづく思ったものです。

ところが朝の行事に新しい要求が加わってきました。園から外部へ出るには三か所の出入口がありますが、走りまわったり、たまたま門の側で遊んでいたりと、目の前の門から外

へ行きたい衝動にかられるのでしょうか。

門をガタガタとゆすり、開けて欲しいと訴えます。「開かないわね、よいしょ、よいしょ」と引く真似をしても、数分は困ったなという顔をして外を通る車を見ているですが、すぐにガタガタと始めます。教師も心を決め外に出ることになりました。門を一步出るとK夫の片手は教師とつながり、片方の手を振りながら、機嫌のよい時に発する「アッチャー、アッチャー」と

いう声も高らかに軽快に発音です。やり直しの件と異なるのは、楽し気な顔や声のまま近隣の商店（主にお菓子屋、パン屋等甘い物、アイスボックスのある店）に直行することでした。この行動の第一日目、ある商店の人から「こんな子どもを入れることにしたのか。縄でくくっておけばよいのに」と言われ、

悲しい思いをしたことは忘れられません。側ではK夫が袋菓子をつかみ、教師がその袋を元に戻そうと懸命になればなる程抵抗して床に寝そべてしまい、店の人には右の様に言われ……とほんの二、三分のできごとなのですが、とても長く感じられました。奮闘振りを御想像下さい。

その日の保育後の話し合いで「明日から皆ポケットに百円を入れておこう」と決めました。お菓子類を手にしてしまった時、店の人に咎め立てられないためには必要なことでしたし、

外部に出れば緊急の連絡に電話代も必要だと考えたからです。しかしこれは私共の立場からだけの提案であり、K夫の側に立って話し合ったことは、とにかくK夫の要求通りに動こう、動いてみようという決心をした事でした。要求通りに買いつけることがK夫にプラスなのかマイナスになるのか、どうしてやる事が一番よいのか分かりませんでした。K夫の要求をせんとはいは聞いてくれた”と満足することで何か通じるかもしれない、ここから道はきつと開けると信じ、毎日話し合い、その時々表情や反応を報告し合う毎日でした。

”あの幼稚園は、一人だけ外へ行ったりする変な園”と思ったり言う人がいましたが、私共にとってはひとりひとりを大切にすると、この具体的な表われを、今のK夫にどのように示してやれるかが課題であったのです。そして近隣の批判に対して私共がとった居直りにも似た態度は、話すことのできないK夫の心と私共を結びつけたように思います。

五月になって暑い日が多くなると、外出の際に求めるものはアイスクリームが主になってきました。登園後一時間半位砂場、水遊び、粘土等と遊んだ後、側にいる教師の手を引いて門を開け、時には飛びこえて園外へ出たようになります。

日によって違いますが、ひとつの遊びにかなりの時間集中した後であるため、喉のかわきと空腹、そして狭い園から広い場所へ次の活動を求めているのではないかと思います。

喉のかわきと空腹らしい点に気付いた時の解決策のひとつとして、離乳後間もない赤ちゃんの四回食的な要素を取り入れてみてはどうかということでした。母親と連絡し合い、食パン一枚程度を昼食用とは別包みにしていただき、門の外へ行きたがったら”食べよう”とすすめてみるということでした。家庭でも紅茶、コーヒー以外は飲まないということですので、水を飲んでみせ、飲める物であることを知らせました。その後もアイスクリームやジュースを欲しがることであっても、間隔がほとんどあいてきたり、従って園外へ出ることも減って来ました。アイスクリームやお菓子をを通してK夫が本当に求めているものが何であるかを考える努力をする時、表面に出る行動そのものについて特別悩んだり、世間体を気にすることが少なくなってきた私自身に驚いています。

### K夫の行動と他児との関係

K夫の要求に応える日々の生活で、他の子どもの反応は様々でした。

K夫と園外の散歩から帰り、門に入った時にすぐ声をかけてきました。

A男「K夫ちゃんどこに行つたの？」

教師「お散歩よ」

A男「どこまで行つたの？」

教師「駅の方まで。A男ちゃんも行きたい？」

A男はちょっと考えていましたが、

A男「いい、僕は幼稚園で皆といる方がおもしろい」

教師「そう、行きたくなつたら言つてね」

A男「いい」と言いつつ内心は羨ましいに違いないと思ひました。「僕も要求すればK夫ちゃんと同じように聞き入れられる」と安心したようで、それ以後は庭の穴掘りに精を出す毎日になりました。

○

登園時の十五分間だけ門を開け「おはよう」の挨拶のため教師が立っていますが、三学期のある朝、すでに登園していた年長男児B夫が、再び門の所にやってきて、車の往来に気を付けながら門を飛び出しました。教師の目と合うと「ほくK夫」と言い道路を数歩歩いては喜んでゐるのです。母親との連絡では秋頃から家庭でも「K夫ごっこ」をしてゐるようで、B夫の要

求が理解できたように思ひました。K夫と同じ行動をすること、B夫自身が内に秘めてゐる要求が前面に出たように思ひます。現在小学校一年生のB夫は校外へ出られないことを知り、K夫ごっこをすることも許されないと知り、担任教師へその感情をぶつけることもできず、その苦痛を登校拒否という形で訴えています。

○

筆の先にポスターカラーをつけ、ふりまわしている間に紙に飛んだきれいな色の組み合わせに感心し、「これだれがかいたの？」「へーK夫くんもじょうずにかけるね」と言つたり、昼食時に友だちのお弁当箱に指を入れ、デザートを食べてしまつて「ありがとう」とこっくりをしている様子に、「K夫くん今日ね、ありがとうって言つたんだ」と降園後母に報告するC君、それを本当のことと思ひ喜んで降園後飛びこんで来たC君の母親。

毎日の生活の中で起きるちよつとしたことのひとつひとつを、当然のこととして流してしまわず、それぞれの中で感じる努力を、これからもしていきたいと思ひます。

(阿佐ヶ谷教会つばみ会)

★海外文献紹介★

『振り返って、方向性を探る』

by Sara L. Leaper

『標準テストと調価』

by Vito Perron

Childhood Education

October 1976

“Childhood Education”第五十三卷（一九七六—七七）は、全号をACEIのアクション・プログラムの三つの柱、「人間性の涵養」について意味のある、現実的な方法の探索に当てている。第一号（一九七六年 十月）では、最初に前ACEIの会長で、現メアリーランド大学教育学部教授サラ・ハモンド・リーパー博士の「振り返って、方向性を探る」という論文を載せ、このテーマの基本的課題を明らかにしようとしている。雑誌編集者コーエン氏によれば、この論文は建国二百年記念行事とも深いかわり

をもって企画されたそうで、同じく幼稚園百年を迎えた我が国の幼児教育関係者にも示唆するところの大きい論文ではないかと思われる。リーパー博士の結論を先に述べてしまえば、今一度「全体的な子ども」(The Whole Child)の教育の必要性を強調するもので、幼き人間の教育の健全な「常識」を米国の幼児教育界に回復させようとする意図が伺える。リーパー博士はどういう根拠をもとに、このような結論を導き出したのであろうか。また、「全体的な子ども」の教育とは具体的にどのようなものとしてとらえているのだろうか。この二つの観点からリーパー博士の内容を紹介してみよう。

リーパー女史にとって「未来」という言葉から連想するのは、かつてACEIの会合でジェイムス・ハイムス二世の語った次の言葉である。「明日への最善の備えは、今日を豊かに充分に生きることである」また、「豊かに充分に生きる」子どもの教育のことを想うとき、同じく思い出すのは別のACEIの会合でのキルパトリックの言葉——「子どもは生活から学ぶ。生活を受け入れ、生活の中で働きかけて学ぶのである」——である。幼児教育への深い洞察をもった二人の言葉を統合すると、未来の教育の方向はおのずから全人教育を旨とするものとなってくる。心理学者マズロ

ウは、かつて、「使用されない能力や器官は、病いの中心になり、萎縮して、人間の能力を低下させる」と言ったが、最近の爆弾事件や銀行強盗、その他の社会の凶悪な犯罪を見ると、明らかに、子どもの全体的な教育がなおざりにされてきたことがわかる。

精神（認知的、知的）、身体そして感情（情緒、情動、社会性）は、すべて重要である。その一つがおろそかにされても、それらの相互関係が無視されても、問題が生じるにちがいない。このような観点から、リーパー女史は、「私たちの仕事は、このすべての領域の諸能力が発達するように子どもたちを助けることである。」と主張するのである。

人間の全体を構成する三つの領域は、具体的にどういうものだろうか。

知的、認知的領域は、しばしば読みと算数につなげて考えられるが、フレイツァーの指摘するように、「学んだ技能は、それを実際場面で応用してみない限り、それが身についたかどうか、保障できない」のである。それでは、本当の資質の発達は、どのようにしてもたらされるのだろうか、次のような例を引用して説明している。

「ジョーは、テーブルを作っていた。ものさしが、テーブルの

足を測るために用意される。ジョーは、「見ただけで、足がちゃんとしているのがわかるよ」と答える。でき上がったテーブルはぐらぐら。すると、ジョーはがっかりして、「足を直す、あの棒はどこにあるの？」と尋ねた。この教師が用意した『棒』は役立ったのである。ジョーはその年の終りまでに、ものの測り方、すなわちインチとかフィートとか、ヤードについて学んだのであった。」

次に、感情、情動、情緒の領域には、肯定的な自己イメージや、自分や他の人々を快く思う気持ち、あるいは自己理解の発達などが含まれるし、身体的な発達には、栄養、休息と遊び、身体運動が含まれる。

さて次に、全体的な子どもを涵養するために、具体的にどのようなカリキュラムを持つべきであろうか。環境、メディアと市場、政治的活動、精神発達など、いくつか重視すべき項目をあげているが、必ずしも幼児教育に適しているとはいえないようである。

このようなカリキュラムを現実につすためには、教師も両親も子どもも、自信を持って仕事にとり組むこと、言い換えれば、子どもを受け入れ、子どもの熱意を受け入れることが大切である。

内から発生する動機をもとになすことによって学ぶ機会と、他の人々と関わる機会は、何かを獲得するためにどうしても必要なことである。

全体的な子どもの教育をおしすすめる場合、私たちは、子どもや青年のさまざまな側面——精神、肉體、感情——について、学習内容や学習方法について関心を持たねばならない。子どもたちは有効に育っていくのであって、はじめからそうできあがっていないのではない。有効な人間は、教育が誇るべきひとつの達成なのである。

ジェームズ・L・ハイムズ二世は、「明日を今作ろう——人的環境」という論文の中で、これを困難にする二つの異なる障害を指摘している。ひとつが技術的な問題であるのに対して、もう一つは、保育所、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学等の教室の雰囲気である。そして、このような障害をとり除くのが教師であるとも言っている。

子どもの保育にたずさわる私たちにとって、子どもが十分に生きられるように助けてあげること——それは、毎日の保育の積み重ねであり、最も重要なこととして心に刻みたい。

次に、ノースダコタ大学のヴィット・ペロンによる「標準テスト

と評価」という論文を紹介しよう。これは、いかに最善に、人間の可能性と学力を評価するのかを論じている重要なものである。ペロンは、なぜ私たちはテストをするのか、その結果をどうするか、標準テストは生徒一人一人にいかん公正であるのか、何を選ぶべきかについて大きな問題を投じている。

現在、アメリカでは、標準テストが「転位知能 (Intelligence to alienation)」、成熟への自己概念 (self-concept to maturity)、創造的精神発達 (moral development to creativity) から、ほとんどすべての人の社会的特質が想像できるものとして存在している。あらゆる場所で、すべての年齢のアメリカ人に影響を与え、主に三歳から二十一歳までの若者に最も重くのしかかっている。A C E I や N A E S S P (National Association of Elementary School Principles 全国小学校長協会) では、特に、小学校の子どもたちへの影響を心配している。なぜなら、この時期は子どもの成長が一定でないし、学校で成功を要求される多くの技能は、流動的な獲得の場にあるからである。標準テストは、広範囲に、知能、言語、レディネス、達成、自己概念を評価する試みであったのである。私たちは、標準テストの利用に慣れてしまったために、評価すると表示していることを実際のテストが評価するかどうか、また、統計学的、精神測定学的構成を基底に持つ仮説が受け入れ



られるかどうかということに疑問を持たなくなっている。

私たちは、本当に、ある集団に行なわれたテストで、一人の人間の知能や能力が適切にわかると考えているのだろうか。標準テストの結果、「標準以上」の子どもたちだけが教育をうけられ、「標準以下」の子どもたちは、失敗者としてのレッテルをはられ、てしまう。

標準テストは、標準指導計画（基本教科書、要目、政府指針）に基づいており、予想期待があり、教師全部がそれで働くように期待されている。しかし、子どもたちはいろいろな方法で学んでいくので、私たちは、目的や目標によって変化のある計画をたてる。子どもたちは、人種的背景や経済的階級とは無関係に尊敬され、彼らの興味は、学習の基本的な出発点となる。だから、教師や子どもたちには、外的圧力は不必要なのである。

現在、標準学力テスト (norm-referenced achievement test) の他に、標準テスト (criterion-referenced test) があるが、これは一つの進歩である。しかし、これも限界があることを忘れてはならない。

私たちは、標準テストの利用と学校の点数の利用の包括的研究の計画をたてている。評価は決して不必要なものではなく、不可欠のものであるが、目的と一致していなければならない。標準テ

ストに頼らない評価の計画をたてるには、教師が、教室での子どもたちの生活の重要な点を描き、構成することである。教師は、学習の過程で、子どもたちに獨創性、責任感、努力の自発と自立を望んでいる。また、子どもたちの製作物や、根本的な人間関係、努力に対する尊敬、他の人々への感情を考えていきたい。ノースダコタ大学では、教師、子ども、両親との面接が、評価の計画とたえない発達の基本として利用されている。教師は、系統的な観察と、しばしばの会議と記録を通して、読み、言語発達、算数の領域で、子どもたちの発達を維持できる。教師が子どもたちに広範囲の学習活動を与えると、子どもたちは学習を広げるために、どこで何を要求するかという感覚を持つようになる。また、両親も教室で観察し、学校教育について知り、子どもたちの教育に総合的に寄与できるのである。

教師や学校が子どもたちにかわって努力の本質を証明し、意味ある評価をしなければならない。

日常、何の疑問もなく利用していて、当然のようになっていく標準テストをしないで、評価することは、教師にとって大きな抵抗があるだろう。しかし、目的と一致した評価をするには、何が最適であるのかを考えなければならない。勇気をもって、取りかんでいくべき課題である。（松山東雲短期大学・角能清美）

# 保育の体験と思索

—子どもの世界の探求—(九)

津 守 真



## 入園を前に心躍らせて待つ心

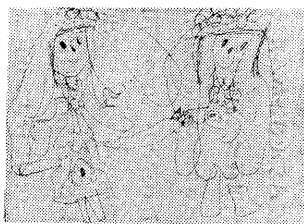
いまとは違った、いま見えていない生活を前にして、心躍らせてそれを待つ時がある。幼い子どもの場合、その期待は純粹であって、少しも疑いを知らず、ひたすらに胸躍らせて待つ。外出の前、旅行の前、祭の日、誕生日やクリスマスのパーティの時、贈り物をもろう前など、その純粋な気持ちのふくらみを、もはや容易には得られない残念さと共に記憶している人は多いと思う。Yが四歳の二年保育の年少組に入園する前の一、二か月はまさにそのような心の状態であった。

「幼稚園にはお友だちがいるでしょう、あたしだけのお友だちがいるでしょう」こう言って、Yは幼稚園にゆけば、自分だけの友だちがいると思って楽しみにしていた。兄や姉の友だちはたく

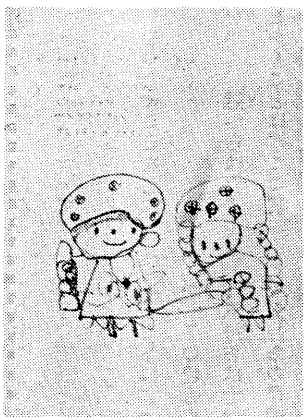
さん来るし、その中にまじって遊ぶが、いざとなればさっと立ち去って自分だけ取残される経験をしばしばしている。幼稚園にゆけば自分だけの友だちがいるだろうというのは、幼稚園のことが話されるときにYが述べたことであった。

写真1(2月11日、4歳3か月)は、着飾った女の子が二人手をつないでいるところである。Yはこのごろ、手をつないだ女の子の絵を数多く描く。

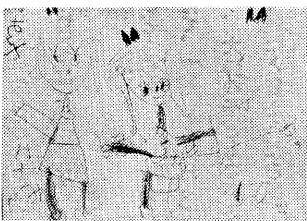
写真2(2月17日、4歳3か月)も、手をつないだ女の子である。これを描きながら、「おさげのぼうしよ、これ、あたしのみただけと模様が違うの。あたしのに模様なんかないでしょ。やぶけてもかくよ。お友だちと手つないでんの」という。この日は朝から姉の友だちがきて、Yも一緒に紙のおひなさまを作ったりした。それから私は、よく附属幼稚園で見ていたような水族館



▲写真 1



▲写真 2



▲写真 3

を、空箱や紙で作って半日を過ごした。友だちが帰ったあと、みんな紙を出してきて絵をかきはじめた。Yは姉が持っているうす紙がほしくなって、「うすい紙でなんかうつつすから、この紙ちょうだい」と言って姉たちの間をまわって歩いていった。ようやく一枚もらったが、もっとたくさんほしいと言って泣いた。「お母ちゃまが紙買ってきたら、ゼーんぶちょうだい」と言って泣く。私もその場において、ごたごた片づけたりなどしていたが、「ほんとに、ぜんぶほしくなるねー」と言うと、Yはすぐ泣きやんで、「でも、みんなにわけてあげるんだね」という。そのあと、そばにあった紙にかいたのがこの絵である。子どもが一枚の絵をかこうと思うに至るのには、それだけの経過があることがわかる。そ

して、こうして自分から描こうと思った絵には、そのときに子ども心の中心にあったものが出てくるのだと思う。おさげのついた白い帽子は、Yの大好きな気に入った帽子である。それをかぶった女の子は、Y自身でもある。そして友だちと手をつなぐということは、Yの心のおこがれであり、それが絵にあらわれる。途中で紙が破けるが、それでもかきつづける。

写真3（3月1日、4歳3か月）は、同じく手をつないだ女の子であるが、人数が三人になっている。

写真4（3月4日、4歳4か月）は、六人の女の子が手をつないでいる絵である。これをかきながら言う。「幼稚園には、いろんな人がくるでしょ。でもね、男はいれなかったの。いじわる

な男はいれないけど、Aちゃんはやさしいから。幼稚園の人のおとなはきていないのよ。女って、だーいすき。だって、女ってかわいいもん」Yが幼稚園にゆく一か月前のことであるが、幼稚園にいくと、こんなにたくさんの女の子が手をつなぐことを心に思い描いていると言ってよいであろう。

同じころに、Yは三枚つづきの電車の絵をかく。窓からは女の子がたくさんのぞいている。Yが電車の絵をかくことは、この前も後も、ほとんどない。このころには、それ程にYの心は動いており、はずんでいたのだろうと思う。

写真5（3月28日、4歳4か月）は、細長い紙に横向きの女の子が四人並んでいるところである。これをかきながら言う。「これ横向き。お友だちと遊んでんの。また三つ編みしてる人がいいわ。これがあたしでしょ、これがPちゃん、これがAちゃんのお友だちで、これがAちゃん。」

こうして、一枚の紙に何人も人の絵を描くのは、決して偶然ではなく、子どもの心の中には、何人も子どもと一緒に遊んでいたりと楽しんだりしていることではすでに明らかである。また、手をつないだ絵を描くのは、自分がだれかと手をつないでいるところを心に描いているのであることも明らかである。子どもが自分から描きなくなると描いた描画には、子どもの

心の中に動いて感じられているものがあらわれるのである。

Yの描画と限らず、子どもの描画には、その子どもの心があらわれるので面白い。

子どもによって、入園前の子どもの状態はいろいろである。Yの場合には、友だちを得て、友だちと交わってゆこうとする気持ちは十分に成熟しており、大勢の子どものいる幼稚園にゆく気持ちの準備は十分にできていたと言えるだろう。

写真6（4月8日、4歳5か月）は、入園の直前に描かれたものであり、「さくらんぼをとってる子」と名付けられたはなやかな絵である。大きく成長した自分自身が描かれ、手を伸ばしてさくらんぼの実をとっている。くだものやの店がある。また女の子は、家の外に出ている。友だちと手をつなぐことを楽しみにして待ち、いまやその機会がくるばかりになっている精神のふくらみを見ることができるところである。

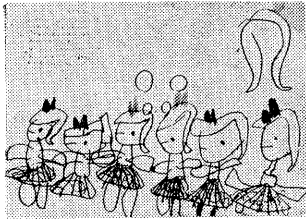
## Yの入園

4月10日

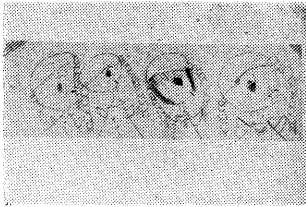
幼稚園の入園式の前の晩、ねるとき、ベッドにねかせにいった私の顔を見て、Yはにこにこして言っていた。「うれしいなー、

うれしいな、あしたはMちゃんと幼稚園にいくんだ。お友だちが、五十人も百人もできた」Mちゃんは、近所の女の子で、四歳の年少組にはじめて入園する子どもである。

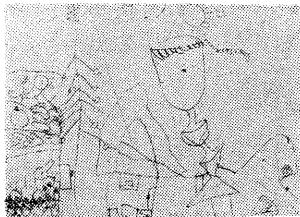
入園式の当日、幼稚園の玄関で上げきにはきかえて、靴を靴箱にいれる。靴箱に名前がついているが、小さなはんどで押した名前をさがすのに苦勞する。一度それぞれの組の部屋に入って座り、入園式の注意をうけてから遊戯室に集まる。先生が大声で、下ばきにはきかえて遊戯室にいきましょうと注意するが、どの下ばきにはきかえるのか、親にもわからない。幼稚園には、部屋のための靴と、庭に出るための下ばきと、通園の靴と三種類ある。それで玄関の靴箱のところ、親と子どもがいりまじって大



▲写真4



▲写真5



▲写真6

混雑になり、親の制止する声が響いて、大きわぎになる。先生たちは入園式の支度に忙しくして、玄関の混雑には気が付かないみたいである。ようやく並んで遊戯室に入り、入園式になる。この日は、友だちと手をつなぐどころではなく、遊ぶ時間もなくて、親も子もへとへとになって帰ってきた。Yは家に帰る途中も、帰ってきてからも、口もきかない。

4月11日

この日は、玄関が混雑する前に行きたいと思い、早めに幼稚園にいった。私は玄関で少し大きな声でYのことを一つずつ言っている。靴をぬいで、——靴箱にいれて、——運動靴を出し

て、——ぐるっとまわって、——帽子をおいて、——スモックをきて」と、一段階終るごとに言っていてやると、その通りやって着がえを終る。保育室の入口まで手を引いていってやると、一步部屋の中にはいるが、じっと立って見ている。

一時間半ほどして帰る時間になる。玄関に出てきたとき、「もう夕方？」と私にきく。もう一日中たつて、夕方になったかのようには思えたのであろう。この日は部屋の入口で立ったまま、じっとしていたとのことである。

この後、ずっと、幼稚園にゆくと同じような状態で、じっと立って見ているだけの日が続く。ときどきだれかと手をつないで歩くことがあるが、大体は何もしないで見ていることが多かった。かなり後になってY自身の言ったことよって分かったのであるが、幼稚園では遊ばないと自分できめていたようである。家に帰ってからは、間もなく、以前と同じように、兄や姉や、その友だちとよく遊ぶようになる。

写真7（4月15日、4歳5か月）は、入園後ほとんど最初にかけた絵である。戸棚があり、その左わきの囲いの中に女の子が入っている。紙の上方に線がひかれて、全体が家の内部のようになっている。囲みの中の女の子は、Y自身を示すものであろう。Yはいまや、自分自身、幾重にも囲みの内部に入りこんだかのよう

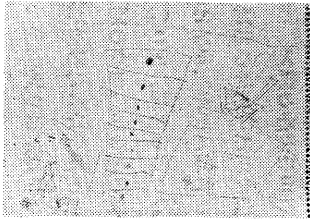
に感じていたのであろう。この後家で描くYの描画には、これと同種のものがつづき、友だちと手をつなぐ絵は、秋になるまであらわれない。Yがこの後再び、積極的に外に関心を向けるようになるのは、一年以上たつてからである。

Yの入園前後の様子を、家庭の側から観察したところを記した。幼稚園の側から見れば、入園式は幼稚園のはじまりであり、この子どもは、最初の日から何もしないで立っている子どもであつたらう。しかし、子どもにとっては、入園式が幼稚園のはじまりではなくて、幼稚園にはいる日を待ちはじめたそのときから幼稚園のはじまりであった。先生から見ればじまりは、子どもにとってははじまりではないのである。子どもたちはそれぞれいろいろの思いを持って幼稚園にくる日を待っている。

ここに述べたYの場合は、その一例であるが、他にも似たような例はかなりあるのではないかと思う。

幼稚園にいったら、自分の友だちと遊べるだろうとわくわくして待ち望み高揚した幼児の心は、たとえ実際には破られることがあっても、張りを持って待ち望んでいたその時が貴重なのである。子どもの生活は、未来に対する希望を持った張りが基調となつて、それが子どもの明るさとなつているのかもしれない。青年

期でも似たようなことがある。おとなの社会は、それを経験した者にとっては、夢からは縁遠い汚濁したものであっても、青年はおとなの生活の入口で夢を失わない。夢が破れてゆくのが避けられない現実であっても、未来には夢がないことを早くから教える必要はないであろう。おとな自身にしても、現実が困難と落胆が多くとも、心の片隅には、決して夢を捨て切つてはいないのではないか。幼い時に純粹に希望に胸をふくらませて待つ体験がなかったならば、困難な現実にはぶつかったとき、その中からも夢を生み出してゆく力は湧かないのではないだろうか。友だちと手をつなぐ絵をかきつづけて幼稚園を待っていたその高揚した生活のその時が、この子どもにとって価値があったのだと思う。



▲写真 7

幼稚園が子どもの期待や夢を叶えることができなかつたからと言って、幼稚園の良し悪しを断ずることはできないであろう。知らずして子どもの期待を裏切ることには、どこでも起こることである。しかし、だからと言って、子どもを受けとる側に立つた場合、子どもを受けいれる仕方はどうであってもよいというのではない。幼児が生活しやすいような受けいれ方の工夫が必要であると思う。私は自分が子どもを受けとる立場に立たされるときに、いつもこのYの例を思い起こして、あれこれと考える。

入園式というのは、幼児にとってどれだけ意味のあるものなのだろうか。幼児が幼稚園に来た最初の日に、そのまま自然に遊べてしまったら、どんなに幼稚園の生活にはいりやすいことであらう

うか。入園式が必要ならば、子どもたちが幼稚園になれてから後の方が有効ではないだろうか。

入園の最初の日の物の配置、空間の使い方、物の整備など、こまかいことは記せば限りないし、どこでも多くの工夫をしていることである。そして何にもまして、おとな自身が、早くから子どもの方に心を向けて日を過ごしていることが重要であると思う。

そして、入園の最初の日には、他のことに気をとられることなく、子どもとふれることに専念できるようにしたいと思う。

子どもが毎日くるようになったら、それぞれの子どもがどんな思いを持って来ているのかははかり知れないことであって、日々子どもと共に歩むよりほかないであろう。入園したての時期に、これだけのことはしなければと、こまかい活動事項に気を奪われていたのでは、子どもと共に歩むことはできなくなる。それぞれの子どもが安心して動ければよいし、楽しんで何か少しでもできればなおよい。おとなの側からいうならば、子どもにふれることができたという実感が持てればよい。これらのことをぬきにして、何事もできないと思う。子どもの夢を叶えるというのは、あたりまえに自然な心で子どもにふれて、共に生活する以外にないのではなからうか。その中で、子どもが楽しみに期待していたものや、あるいは不安が何であったのかがわかるし、それに応じ

て、こちらでどう動けばいいのかも分かってくる。やらせなければならぬことで頭がいっぱいになっていると、子どもの心がこちらに伝わらなくなる。

#### 四歳児

これまで、三歳児の保育を主にして述べてきた。三歳児とのふれ合いの中で考えてきたことは、まだ書き足りないが、筆の方が遅く、附属幼稚園でつき合ってきた子どもたちが四歳児になったので、これから四歳児の方に移ろうと思う。家庭児のYは、三歳児の時は幼稚園にゆかなかった。附属幼稚園の三年保育の子どもたちは、四歳になると、新たに二年保育で入園する子ども二十名を加えて、一クラス約三十五名になる。愛育の知恵遅れの幼児についても、できるだけ四歳児を主にして記したいと思う。

四月十八日

久しぶりで、また四月になってはじめて、附属幼稚園に入った。室内に入ると、七、八人の子どもが静かに遊んでいる。三歳からの男の子が数人ブロックをつなげており、また新しい男児が



三人、そのそばで積み木をしている。

私が床に腰をおろすと、三歳からの男児Sがブロックをつなげたのを私のところに持ってきて、「これ、なんだ」と言う。私が何だろうというのと、「ほら」とブロックを一部分ひきぬいて見せてくれる。そうすると、ロボットの形になる。一年前に私がおはじめてこのクラスに来たときに、最初に私の傍で積み木を始めて、シンメトリーに積んで遊んだのは、この同じSであった。その後一年間を通して、Sは私とそれほど親しくつき合った子どもではない。ところが一年後の新学期のはじめに、室内にいて、最初に近よってきたのがSであることに驚く。Sが作っていたロボットは、Sにとっては何なのだろうか。

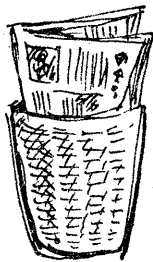
男児T、Y、Kが、ブロックを持って、「バーン」と私にぶつかってくる。いずれも三歳からの子どもで、久しぶりで私に会ったあいさつのようなものである。私は床にひっくりかえりながら、この子どもたちが、久しぶりの邂逅なのに、こうして私にぶつかってきてくれることをうれしく思う。

三歳からの男児たちは、新しい子たちとすぐ近くで遊んでいるのに、ほとんど交渉がないようである。以前からの子どもたち同士のかたまりのようなものが目立つ。新しい子どもたちはまだばらばらだし、だれにでも同じように話しかけたり、傍に寄って

ったりするようであるが、以前からの子どもたちは、知っている人同士で話し、一緒に遊び、新しい子どもにはふれることのためにいろいろあるようである。このことは、後にまた、とり上げることになるであろう。

庭に出た時、砂場で水を流していたMくんが、私にシャツの腕をまくってもらいにくる。Mくんのことには以前に記したことがあるように、私に体でぶつかってきた子どもである。久しぶりで会ったMくんが、私にやわらかく、素直にふれてきたことに驚く。

Mくんは、幼稚園でよく遊んでいるように見えるけれども、新学期になってから、家に帰ると、「きょうは、ちっとも先生とあそばなかった」と言うとのことである。先生は新しく入った子どもに手をとられているので、以前からの子どもは、先生と遊べなかったという物足りなさを感じているのだろう。新学期には、二年目の子どもにも、それなりの苦労がある。(つづく)



オランダから来た友人と話していたとき、私は、ドイツでは受験勉強が厳しいときが本当にそうなのか、また、オランダはドイツの隣国であるが、その点はどうなのかとたずねた。そのオランダの学者は、ドイツの学校はいろいろであって、一般論をいうのはむずかしいと何度も前置きをして、しかし、オランダ人の通念からすると、ドイツ人はしつけ（デインプリン）を重んじ、勤勉（ハードワーク）を好むが、しつけと勤勉は、オランダ人の最も好まないことばであると答えた。しつけは機械的な訓練であって、それはオランダ人の好まないことであり、オランダ人は何よりも、自由を愛するとのことであった。日本人の見方からすると、一生懸命に働くこと、すなわち、勤勉は、何の疑いもなく良いことであらう。しかし、別の見方からすれば、勤勉は、人の中の何かたいせつなものを失うことでもあるという。そして、しつ

けと勤勉は切り離すことのできないものである。オランダ人から見ると、日本人は、しつけと勤勉を愛するように見えるらしい。もちろん、これは通念であって、日本人にもいろいろの人がいるからこの通念が実際に当たっているかどうか分らないがと、また何度も前置きをして、もう一つ、オランダ人から見ると、日本人は集団人（グループビープル）であるという。何かの目的に向って、皆がひとつになつて働くところは、目的は見えるけれども、人は見えなくなつてしまふ。それは能率をあげるのにはいいかもしれないけれど、人の人生はなくなつてしまふ。

日本の中だけで考えると、その中の価値観がすべてと思いがちになるけれども、外国の、全く普通の人からは違つたように見えることを示されたように思う。能率や効果ではなくて、人間を見る目をたいせつにしたいと思つた。（津守）

## 幼児の教育 第七十六巻第八号

八月号 © 定価二〇〇円

昭和五十二年七月二十五日 印刷  
昭和五十二年八月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

©本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館 にお願ひいたします

**\*保育用品\***  
**ピックアップセール**

好評  
実施中!!

つくるよろこびがいっぱい!!

幼児の創造性を育てるフレール館のオリジナル商品

**マイブロック**

意匠登録出願中

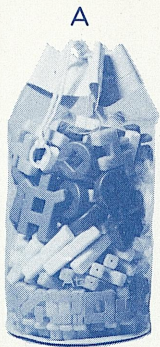


Aセット(個人用)

95個入 1,800円

Bセット(園用)

240個入 4,800円



**ミニストアー**

39,500円

遊びにあわせて簡単に形を  
組み替えられます。



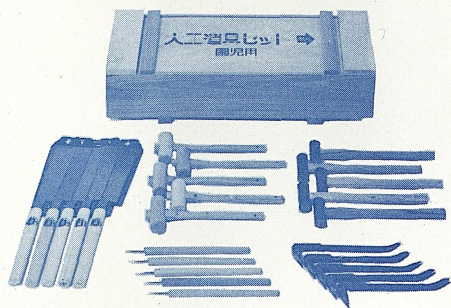
○パネル寸法: 高さ45cm・幅90cm・厚さ2cm  
フラッシュコアボード

○商品内容: 棚付パネル4枚、入口パネル1枚、  
棚受8枚、固定ピン16本、連結棒6本

**大工道具セット** (園児用)

20,000円

幼児製作用、グループ製作用。



○木製収納箱: 長さ68cm・高さ17cm・幅28cm

○商品内容: 両口げんのう(かなづち)、四方きり、  
かじや(くぎぬき)、木づち、片刃のこ  
各5本

運動会を楽しく盛り上げる

フレーベル館の

# 運動会用品



●ご注文の際は、お早目にお申しつけ下さい。

今年も新商品を加え、一層充実しました。

○大玉 (赤白1組)	16,000円		○平均台 (特製大)	26,000円	
○大玉 (赤、黄、青、白1組)	32,000円		○平均台 (特製小)	21,000円	
○大玉空気入 (足踏式)	4,000円		○平均台 (普及型)	13,000円	
○バスケット台 (紅白2台1組) ネットつき	19,000円		○紅白帽子 (1個)	220円	
○バスケット玉 (100個1組・紅白各50)	8,500円		○色帽子10色 (1個)	300円	
○ネット (紅白1組・バスケット用)	2,000円		○等賞旗 (1~5等1組)	2,000円	
○すずわりセット (紅白2台1組)	30,000円		○万国旗 (20枚1組)	4,500円	
○綱引ロープ (30m)	19,000円		○紅白旗 (紅白2枚1組)	400円	
○キンダーファニートンネル	14,000円		○旗立台	950円	
○キンダーファニートンネル T字型ジョイント	14,000円		○巻尺 (30m)	3,100円	
○キンダーファニートンネル Y字型ジョイント	15,000円	○アーチ (入退場門)	40,000円		
○キンダー6色/バトン (6本1組)	1,100円	○キンダー6色円塔 (6本1組)	11,000円	○テント 4.78㎡ ~ 25.06㎡	51,200円 ~ 136,500円
	○キンダーカラーフープ (6色1組) (特大)	3,800円			
	○キンダーカラーフープ (6色1組) (大)	3,000円			
	○キンダーカラーフープ (6色1組) (中)	2,400円			
	○キンダーカラーボール(大)	400円			
	○キンダーカラーボール(中)	280円			
	○キンダーカラーボール(小)	90円			
	○キンダードッジボール (6色1組)	6,200円			
	○キンダーサッカーボール (3色1組)	4,100円			
	○ポンプ (ドッジボール/サッカーボール用)	1,450円			
	○ライン引	4,900円			
○キンダーハイジャンプ (2台1組)	9,800円				

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課 TEL 東京(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

創業70年・キンダーブック創刊50年 フレーベル館